

文学に表れた平泉文化の基礎的研究（その5）

—菅江真澄が記録した毛越寺常行堂摩多羅神の祭礼—

相原 康 二*

拙稿（その2）において別稿を用意すると述べたが、今回それを行なうものである。真澄が記した祭礼の様子を整理し、それと毛越寺の資料とを照合し、併せて、現行の祭礼との異同を確認することを目的とする。

摩多羅神の祭礼のことは天明六年（1786）の日記『かすむこまがた』に詳述されている。

◆『かすむこまがた（迦須牟巨麻賀多）』

天明六年の正月を仙台藩領胆沢郡徳岡（とくおか、旧胆沢郡胆沢町小山）で迎え、村人の正月行事の様子や、平泉毛越寺の摩多羅神の祭礼を見て、二月二十二日、同郡白山村六日入（しらやまむら・むいかいり、旧胆沢郡前沢町白山）の鈴木常雄宅へ行ったまでの日記。題簽は「かすむこまかた 春みちのく」と真澄の自筆。本文の冒頭にも題字があり、「迦須牟巨麻賀多 菅江真澄誌」と記されている。なお、仙台藩領滞在中の真澄は、未だ白井秀雄と名乗っていたが、本稿では真澄と記述する。

一 原文

（底本には内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集 第一巻』1981年 未来社刊を使用した。なお、二十日以前の部分は省いてある。又、ルビは原文通りである。）

「二十日 けふは磐井ノ郡平泉ノ郷なる常行堂に摩多羅神の祭見ンとて、宿の良道（よしみち）などにいざなはれて徳岡の上野を出て、はや外（ト）は春めきたりなンド語らひもて行ク。遠かたの田ノ面の雪の中にこゝらたてならべたる鶴形（ツルガタ）は、まことにあさるさまして、真鶴（マナツル）、黒鶴（ナベツル）、餌ばみ、立首なンド、みな生るがごとし。こは、去年の秋、稲刈りをへるやいなや此鶴形を立り。此鶴の始めは、いちの世ならむ及川某といふ武士（サモラヒ）造りそめぬ。其後胤（スエ）なほありて、其及川の家に刻ミ彩りたるははかなきやうなれども、鶴の能ク飛び下降（クダ）るといひ、また良工（ヨク）もの作る人の心をつくして造りたりとも、人は、めをおどろかしぬれど、鶴（トリ）の目は、そをよしともおもはざりけるにや、及川が家の鶴形には、今も能く鶴の群れくだるといへり。

（中略）

註*摩多羅神—最澄（伝教大師、767〜822）が唐よりもたらした神で、天台宗

で尊崇され、円仁（慈覚大師、794〜864）が比叡山常行三昧堂の守護神とした。平泉毛越寺の常行堂でもこの神を祀り、毎年一月二十日に行われる廿日夜祭は、延年舞が奉納されるなど、平安時代の祭りの古態をよく保存している。国重要無形民俗文化財

*常行堂―常行三昧を修する堂。常行三昧とは、天台宗で、7日または90日間、常に阿弥陀像の周りを回って、阿彌陀の称号を唱え、一身に阿弥陀様を思つてやまない修行。毛越寺常行堂の宝冠阿弥陀像の後方の祭壇に摩多羅神と二人の童子の木像が秘め祀られており、室町時代の作と推定

*宿の良道―村上良道、当時、兄の良知（よしとも）に代わつて真澄を案内していた

*鶴形―世界各地にある囀の鳥の模型（子コイ）に当る鶴の形。寛政十年（1798）里見藤右衛門（さとみ・とうえもん）著の『封内土産考（ほうない・どさんこ）』に「胆沢郡より毎年早秋に初鶴を献す。此郡多く鶴を捕獲す。田野に鶴形を置く。木を以て之を造り、其形おおそらになきて友鳥を呼もあり。又、地下に首を垂れて啄むものあり。実に生ける鳥の如し。鶴曳れて下て群るを伺ひ其程よきを見て鉄砲を放ち之を得る。鶴に限らず鶴（くぐい、白鳥）、雁共にその術をなせり」とある。鶴形は昭和45年頃まで見ることができた由である

（中略）

かくて摩多羅神の広前（ミマへ）にぬかづく。いまだ人もこゝにいたらねば、今しばありて来らむとて、千葉某といふ人のもとに行なんとて人にいざなはれて行ぬ。しかして此あたりを見わたす。慈覚円仁大師陸奥国（ミチノク）修行（スギヤウ）のとき、白毛（シロキケ）のちりこぼれたるをあやしみ此毛を踏越（フミコエ）て山に入り給ふに、白鹿にうちもたれて眠る老翁あり。

こは、いかなる人にておはしけるかと円仁とはせ給ふに、我は此山を守護

（マモレ）る翁とて、鹿とともにかいけ（ち）て見えず。円仁、こは此山をひらきて、賤山賤等（シツヤマガツラ）がために仏法（ホトケノミヲシへ）流布あれと神の造（ツゲ）給ふにやとかしこみ尊みて、薬師如来を安置（スエマツリ）て医王山毛越寺金剛王院といふ。天台宗にてあまたの堂舎、あまたの衆徒など費（イラカ）をならべて栄えたりし山ながら、二元龜三年（1572）の野火にたちまちやけて、今は礎のみぞ残れる。

註*千葉某―平泉に居住した屋号「善阿弥（ぜんあみ）」の千葉家か？ 肝入を勤めた名家で、胆沢郡徳岡の村上家とは姻戚関係にある

*慈覚円仁大師―天台宗山門派の開祖、794〜864年

*医王山毛越寺金剛王院（いおうさん・もつづつじ・こんこうおういん）―『平泉旧蹟志』に「嘉祥年中、慈覚大師の開基にして、其後、後鳥羽院の勅願の霊場なり、その頃勅願使として左弁富任（とみとう）卿下向し給ひ、基衡勅を奉して堂塔・仏像を建立し、秀衡相繼て是を造営す（中略）

一金堂址 東鑑に「金堂を円隆寺（えんりゅうじ）と号す、金銀を鏤め紫檀赤木等を継ぎ、万宝を尽くし衆色を交ゆ。本仏は丈六の薬師同十二神将を安置す。日天月天も有しといふ、運慶これを作れり、仏菩薩の像玉を以て眼に入ること、此時を始とす。講堂・常行堂・二階総門・鐘楼・経蔵等これあり。九条関白家（藤原忠通）御自筆を染られ額を下さる、参議教長卿堂中の色紙形を書せらる。此本尊作立の間、基衡運慶に贈れる処、金百両、鷲羽百尻、七間々中径水豹皮（ななけん・まなかわたりのあざらしのかわ）六十余枚、安達絹千疋、希婦細布（けふのせばぬの）二千疋、糠部（ぬかのぶの）駿馬五十匹、白布三千疋、信夫文字摺（しのぶ・もじずり）千端、此外山海の珍物を添らる。又別祿と称し生美絹（すずし）船三艘に積みて贈之、凡三カ年の間に造り出せり（中略）

一講堂址 金堂址の東にあり、本尊胎蔵界大日、是又焼亡して礎石今に残れり（中略）

一嘉祥寺（かしょうじ）址 講堂の西なり、礎今にあり、東鑑に、未だ功を終さ

る以前基衡卒去す、秀衡これを造り卒ぬ、四壁並に三面の扉法華經二十八品の大意を彩り爰がけり、本仏は薬師の丈六なりと云へり(下略)」とある

*毛越寺の寺名起源伝説―真澄の記述の通りである。ただし、このあたり地名は毛越(けごし)であるが、寺名より生じた可能性があるが、全国各地に存在する朝顔を意味する「牽牛子(けんじゆ)」が関係しないか？

また嘉祥寺破壊(スタレ)こぼれたるときは、堀河院、鳥羽院の勅ありて、ふたゝび興して藤原ノ基衡の建りといふ。また嘉祥寺におしならべて円隆寺といふも新(アラタ)に建立ありき。その時の勅使は左少弁富任ノ卿なり。富任、三年(ミトセ)此平泉に住(スメ)り、その跡は勅使屋敷とて、今は

島崎坊とて衆徒すめる也。また康元、正嘉のころならむ、相模守時頼、最明寺して落飾(スケシ)たまひて、法ノ名を覚了房道崇と号(ナノリ)て国々めぐり給ひ、こゝにもしばし杖をとめられしといふ庵の跡あり。また舞鶴(マヒツル)が池も雪に翅(ツバサ)のふり埋れ、梵字が池、鈴沢(ススサハ)の池、柳の御所は、清衡、基衡の館の跡にして、其むかし江刺ノ郡豊田ノ館をうつされて、豊田ノ御所とも云ひし(と)なむ。又秀衡、泰衡ノ館は伽羅樂(カララ)ノ御所といふを、人みな、からの御所と呼(ヨベ)り。

註*堀河院―在位1086〜1107年 *鳥羽院―1129年より院政

*勅使屋敷跡―『平泉旧蹟志』に「秀衡の時、勅使按察使中納言顯隆(あきたか)

卿、基衡の時、左少弁富任卿下向せし時の迎館の跡なり」とある、太田川の中流

域に比定 *康元―1256〜57年 *正嘉―1257〜59年

*相模守時頼―鎌倉幕府執権の北条時頼、出家して道崇(どうそう)最明寺殿(さいみんじゆどの)とも。廻国伝説がある。1227〜63年

*最明寺屋敷―『平泉旧蹟志』に「鎌倉時頼入道行脚の日、此所に寓せりといふ、礎石今に残れり」とある。日向館(ひなただて)と般若峰(はんにやみね)の間にあつたという

*舞鶴が池―基衡の妻の建立とされる観自在王院の池、中島あり

*梵字が池―秀衡建立とされる無量光院の池、大小二つの中島がある

*鈴沢の池―『平泉旧蹟志』に「鈴沢池 昔右両社(白山・日吉)の前にあり、今其形少く残れり、西を池上と云ひ東を池尻と云ふ」とある。白山社前から現平泉駅にかけての一带か？

*柳の御所―豊田の御所―柳の御所の名は『吾妻鏡』には見えない。『平泉旧蹟志』に「柳御所址 高館の東方なり、秀衡義経を此館に居らしむると云ふ、又、一説には清衡・基衡二代の居館とも云ふ」とある。

*豊田の館―江戸時代以降、旧江刺市岩谷堂餅田地区に所在する豊田城跡(豊田館跡)で間違いないと思われる

*伽羅樂ノ御所・からの御所―『平泉旧蹟志』に「伽羅樂(かららく)址 新御堂(しんみどう、無量光院)の東、北上川の西、高館の東南に在り」とある。伽羅樂之御所跡として遺跡認定されている

また泉ノ御所ともいへる、そは泉酒(イツミサケ)とて豊酒(トヨミキ)の湧(ワ)きたる事あり、酒は榮(サカエ)のよしをもて、居館(ヤカタ)は泉ノ御所とも名附られつるものか。泉酒の湧出(ワキデ)し池の跡を今は泉崎といふ、また泉三郎忠衡も此処に住みて泉とはいへるならむ、和泉(ニギイツミ)のよしにはあらざるべし。また正月(ムツキ)のやらくろずりの唱歌(ウタ)に、「泉酒(イツミサケ)が湧クやら、古酒(フルサケ)の香(カ)がする、妾持(ヲナメモチ)の殿(ト)のかな」また、今年酒が湧やら、去年(フル)酒ケの香がすると唱(ウタ)ふ処もありき。かたふかといふ処あり、そは片岡ノ八郎弘常が館(ヤシキ)ノ跡(アト)也。また鈴木ノ三郎重家が館ノ蹟(アト)は弘台寿院(中尊寺の本号なり)の山の西ノ麓に在り。

註*泉ノ御所―伽羅樂ノ御所の別称

*泉崎―『平泉旧蹟志』に「泉酒址 平泉館の南に在り、今の海道の東なり、三代の時醴泉湧出せる所なりと云ふ、其址今に在り」とある。現在の平泉駅の北方

*豊酒―豊神酒、酒の美称、おおみき

*泉三郎忠衡（いずみさぶろう・ただひら）、秀衡の三男、現平泉駅の東南に屋敷があったという

*やらくろすりー旧胆沢・江刺地方では「あらくろすり」といった、八戸地方のエンブリに似た行事

*かたふかー安永の『平泉村風土記御用書出』に「片岡屋敷、俗ニかとふかと云ふ」とある。片岡ノ八郎弘常（ひろつね）は義経の家臣

*鈴木三郎重家が館ノ蹟―『平泉旧蹟志』に「鈴木三郎重家屋敷址 高館のした西北にあたる、桜河の下流に近し」とあり、真澄の記述とは異なる。重家は甲斐国の所領を捨てて義経に従った人物

また『円位上人選集抄』に誌（カケ）る、その尼寺の跡あり。また花立山といふ山あり、そは基衡の妻（ツマ、某（ソレ）ノ年（トシ）の四月（ウツキ）二十日に身まかり、此室（オミナ）もろく花を好（スケリ）とて、其日にあらゆる花を彩（イロドリ）作りて此山（に）さして、室（ヲミナ）のなきがらをその花立山に埋（カクシ）てけるよし。基衡の室（ツマ）は阿倍（安倍）ノ宗任ノ女（ムスメ）にして、和歌（ウタ）にも志シふかかりける人にや、木草花をになうめで給ひしといふ。今も四月廿日には僧（ホフシ）あまた出て、かりに葬（ホフリ）のさまして、目をすり掌を合せ数珠（スズ）をすり幡を立て、宝蓋（テムガイ）、宝螺（ホラ）、梵唄（ボムバイ）をうたふ。是を四月の哭祭（ナキマツリ）といふ、もともあやしき祭也。むかしはこの哭祭の日は、知るしらず、僧等（ホフシラ）とともに経をうたひ金鼓（コムク）を鳴らし、あるは、その声じよむまでよくと哭（ナキ）しといひつたふ。

註*『円位上人選集抄（えんいしやうにん・せんじゅうしやう）』―『選集抄』とも、円位上人は西行法師。著者を西行に仮託されている鎌倉時代に成立した仏教説話集、九卷。靈驗や遁世者（とんせいしゃ）・往生者（おうじょうしゃ）の物語、寺院の縁起などを収める

*尼寺跡―『平泉旧蹟志』に「比丘尼山 昔尼寺の在りし所なり、寺址今に在り」

とある、太田川の南

*花立山―『平泉旧蹟志』に「花館山 金鶏山の東に在り、平泉全盛の時の花園の地なり」とある、また、明治時代の「平泉村風土記書出」に「花立山 往古金峯山神事ノ節、毎年吉野桜ノ晝花を為持、右神事行列ニ相立候由、神事過キ右花ヲ相納候所ノ由申伝候事」とある

*基衡の室―安倍宗任の娘、観自在王院を建立し、また京都の大覚寺に残る「如意輪講式」を作成させるなど、仏教に深く帰依した人物。

父の宗任は都へ連行され、「我が国の梅の花とは・・・」の和歌で返したというエピソードの人物。伊予国へ流され、さらに筑前大島へ移された。大島は朝鮮半島へわたるルートに当り、松浦党や宗像氏を通して半島・大陸と結びつきたかつた清衡の思惑で、基衡と結婚させたのではないが、との説がある。

*基衡の室の墓―『平泉旧蹟志』に「小阿彌陀堂の後に在り、近年里人石碑を立つ、碑文に曰く、前鎮守府將軍基衡室 安倍宗任女 仁平二年（1152）壬申年四月廿日」とある

*幡―ばん、仏の威厳を示す荘嚴具

*宝蓋―天蓋、仏像などの上にかざす笠状の装飾

*梵唄―声明（しょうみょう）の一

*四月の哭祭―『平泉 中尊寺・毛越寺の全容―』に「哭き祭 基衡夫人の命日に観自在王院跡の阿彌陀堂で催される珍しい祭りである。毛越寺の僧侶たちによる葬儀の読経の後、白い柩の輿を担いだ列が哭きすすむような読経とともに阿彌陀堂を三周し、北奥にある夫人の墓標へ向かう」とある

*金鼓―金属製の仏具で、平たく中空、ひらかね
*どよむ―響きわたる

また忠信、次信が館跡は、高館の下なる地（トコロ）の岨めける処也。義経の御館（ミタチ）は高館とて、いとく高き処に在りて、その乱ノ世に九郎判官、これまでと怨（エムジ）たる一章（ヒトマキ）を口に含（フ、ミ）て

御妻子（オホムメコ）ともにさしつらぬき、その太刀もて腹かき切り給ひしは文治五年閏四月廿九日、御年卅三、法名（フチノチ）通山源公大居士と彫（エリ）て、霊牌は衣川邑の雲際寺にをさむる也。

註*信夫佐藤一族―佐藤季春（すえはる） 12世紀前期の陸奥国信夫郡（現福島県

福島市周辺）の郡司、藤原基衡の後見役で乳母子（めのとこ）という ▲佐藤基治（もとはる）、季春の子か一族。信夫郡の住人で佐藤庄司・湯庄司と称した。

平泉藤原氏を支えた ▲佐藤次（継）信。忠信 基治の子、母は樋（比）爪俊衡（ひ

づめのとしひら）の妹、秀衡の命で義経の臣下となり、平家追討に活躍、兄の次

信は文治元年（1185）讃岐屋島合戦で討死、弟の忠信は同年京都で討死

*佐藤兄弟の屋敷跡―真澄は高館の下と記しているが、『平泉旧蹟志』は北上川対岸としている

*高館―『平泉旧蹟志』に「一衣川館、又高館とも云ふ、百年程以前、古城址を記せるには、東西四百六十余間、南北百三十間、高さ五十間とあり、其頃は、北上川東山の麓を流れしが、今は此館の下を流る、昔の地図を以て見るに、百年以来の事なり、度々の洪水に崩れかけて今は甚せまい（中略）秀衡時民部少輔（みんぶのしょう）基成（もとなり）朝臣を居住せしむ（下略）」とある。これは高館即衣川館説である

*義経の妻についての説―①武藏国入間（いるま）郡河越庄の河越重頼（かわごえしげより）の娘 ②平時忠（たいらのときただ）の娘 ③久我大臣（こがだいじん）の娘

*義経の位牌―『岩手のお寺さん』に「妙高山雲際寺（みょうこうざん・うんさいじ）曹洞宗、下衣川にある、本尊不動明王、次の位牌がある、

捐館通山源公大居士（えんかん・つうざん・げんこう・だいこう）（義経）

局山妙好尼大姉（きよくざん・みょうこうにだいにし）（北の方）とある。また、

『奥羽観蹟聞老志』に「仁明帝嘉祥中、釈臣岳（しゃくしんがく）者所開、其寺院往昔牛局山（ぎゅうきよくざん）乃号牛局山梅際寺（ぎゅうきよくざん・ばい

さいじ）、中有義経の牌子、曰義経通山公」とある

また『清悦物語』高館落のくだりに「判官、兼房をめして今は生害あるべしと仰らるゝに兼房つゝしみて申上るは、身方残らず討死と聞かせ給ひて御前も、御両人の公達もたゞいま御生害なし給ふと申上れば、義経、今は心やすしと仰られて、御坪の内の岩に御腰をめされて、金念刀（コムネムタウ）にて御腹十文字にぞきらせ給ひける。兼房、御詫なればとて、御前にさふらふとす、み寄りて御首をうちとり奉りて、兼房も腹十文字にかつさばき五臓を掴（ツカミ）て取出して、義経の御首をわが腹の内におしかくし、おのが衣を以て巻てぞ息絶たる。清悦、常陸、近習二人して御所に火をかけて一時のうちに煙とぞなし奉りたるは、文治五年（1189）閏四月廿八日より同晦日まで三日三夜の戦ひにて、高館の御所落城せり。

其時衣川の流血の色に染めて、三日四日水の色を見ざりし」と見えたり。

註*『清悦物語』―清悦という人物は、義経の家臣で、高館落城の時討死せず、それから400年の長命を保って、往時の合戦の模様を語って歩いた。それを小野太左衛門（おの・たさえもん）が聞き書きしたものとされる。清悦は寛永七年（1630）に歿したという

*兼房―権頭兼房（ごんのかみ・かねふさ）、義経の妻の久我大臣の娘の守役、伝

説上の義経家臣

*御坪―御壺、建物或は垣根で囲まれた一区画の土地、中庭

*金念刀―古年刀（こねんとう）、武家重代の刀 *御説（ごじょう）―貴人の命令、

仰せ *常陸坊海尊（存）（ひたちばう・かいそん）―伝説上の義経家臣、仙人について仙術を学び、長命を保ったという

また『上編義経蝦夷軍談』高館落のくだりに「義経も権頭兼房が別れにいと涙にむせび給へども、とても落べき気色の見えざれば云々。杉ノ目ノ太郎行信は義経ノ顔面（カホニ）能ク似たればとて御姓名を犯（ヲカシ）奉り、義経の御身に替りて大将となる。常陸坊海尊も在る子細のさふらへばとて

城に残りて一軍し、趾より追付奉らむ云々。高館に押寄(ヨ)せ勝負を決むと、文治五年閏四月廿九日泰衡が舎弟本吉ノ冠者高衡を大将とし、長崎ノ太郎佐光、同次郎俊光、照井ノ太郎高春等三万余騎を三手に分け、衣川の高館におし寄る。城中にはかねて覚悟云々。早や行信は自害しければ、兼房即時に介錯し、首を錦の直垂(垂)におしつゝ、み座上に直し、其身も腹十文字にかき切れば海存又是を介錯し、其まゝ、処々に火をぞかけたりける。煙にまぎれて、常陸坊は跡方もなく落行ける」。

註*『上編義経蝦夷軍談』

*杉ノ目ノ太自行信(すぎのめのたろう・ゆきのぶ)―義経の身代わり

*本吉ノ冠者高衡(もとよしかじや・たかひら)―秀衡の四男の隆衡

*長崎ノ太郎佐光(すけみつ・俊光(としみつ))―旧栗原郡一迫町長崎辺の武将か?

*照井ノ太郎高春(たろう・たかはる)―旧胆沢郡前沢町に照井館(てるいだて)が、

同衣川下衣川に照井陣場(てるい・じんば)という伝承地がある

*直垂―直垂(ひたたれ)、垂領(たりにくび)式の上衣で、袴と合わせて着用した、

武家の代表的衣服

同五卷「泰衡攻泉三郎忠衡ヲ」くだりに「去程に日本奥州には、泰衡が舎弟泉三郎忠衡は義経に志気(コ、ロサシ)深く、勅命をさみせしなンドかねて叡聞に達し、違勅の罪に依て急ぎ忠衡を誅すべきよし、過にし文治五年六月七日鎌倉の飛脚奥州に到着せり。同キ十三日には泰衡が使者として、一族新田(ニヒタ)ノ冠者高衡、義経の首を黒漆の櫃に入れ美酒に浸し、下人二人に荷せ、腰越の浦まで参着し此由を言上す。是に依て、首実検として和田ノ太郎義盛、梶原ノ平三景時、各鎧直垂を着し甲冑の郎徒廿騎相具し、腰越に来て首実検を遂にける。(東鑑に此首分明ならず云々とあり)

註*泉三郎忠衡(いずみさぶろう・ただひら)―秀衡の三男、平泉の泉屋(いずみや、

現平泉駅北方)に邸宅があったことによる名前という

*志気―厚意、情愛 *さみす―軽んじる、卑しめる

*新田ノ冠者高衡(にいだのかじや・たかひら)―『平泉雑記』の秀衡・泰衡の家人の中に、大河(おおかわの、或はおがの)兼任(かねとう)の兄に新田三郎入道(にいだのさぶろう・にゅうどう)という人物がいる、縁者か?

*腰越の浦(こしごえのうら)―鎌倉の南西部、七里ヶ浜の西端で、古くからの宿場町

*義経は文治五年閏四月晦日に自刃、その報告は五月二十二日に鎌倉へ到着、その首は六月二十三日腰越到着であり、死後40日経つてからの到着である。この4

0日間で異常・不自然ではないか、という疑問が生じ、義経以外の人間(杉目太郎)の首であつて、義経は北へ逃れて無事だったという話へ展開する

*和田ノ太郎義盛(わたのたろう・よしもり)―源頼朝の重臣、鎌倉幕府初代侍所

別当(さむらいどころ・べつとう)

*梶原ノ平三景時(かじわらのへいぞう・かげとき)―頼朝の重臣、義経を讒言し

たとされる人物

是に依て腰越へ御使を下され、泰衡、義経が首を討て送らる条神妙也。就

て泉三郎忠衡、よしつねに無二の忠志を尽(ツクセ)しよし、違勅の者安

穩なる事を得むや、急ぎ忠衡を誅せらるべし。然らずんば泰衡もともに違

勅の名を得られむか。是頼朝が計らひに非ず、勅命の趣キ斯の如くなり。

此旨販て泰衡に申べしと仰遣はされ御暇を給はりける。新田(ニヒタ)ノ冠

者高衡、夜を日に繼で奥州へ馳せ販り右の趣を演しかば、泰衡、国衡、表

には、こはいかにと仰天の体なりしが、忍びやかに忠衡の方へ人をつかは

し右の次第を語れば、此上は御辺の方へも討手の勢を差向べし、自害せ

し体にもてなし高館殿の御跡を慕ひ、父が遺言の通り、蝦夷に渡り命を全

くせらるべしと云送り、同廿六日、勅命なれば是非に及ばず忠衡を誅すべ

しとて、勾当八秀実を討手の大将として、其勢八十余騎にて泉の屋(ヤ)

に押寄せて、鬨を作つて攻たりける。

註*演ずる―述べる

*勾当八秀実(こうとうや・ひでざね)―『平泉雜記』の秀衡・泰衡の家臣の中にこの名前がある

館の中にも忠衡が郎徒ども、こゝをせんとぞ戦ひける。此泉の屋(ヤ)は無量光院に程近し。折ふし夜に入て館に火のかゝりければ、終に無量光院にも火移らんとす。寺僧等も爰を詮と防ぎけるほどに、漸として打消しけり。此寺は故秀衡入道菩提所の為に建立ありし靈地にて、宇治の平等院を摹し、扉には秀衡自ラ狩獵の体を画キ金銀を鏤めたり。火も既に静りければ勾当八秀実泉の屋を点検するに、忠衡を始め郎徒ども自害と見えて、死骸悉く焼損じて其形分明ならざりしとなり云々

「忠衡密渡蝦夷」といふくだりに「其夜泉三郎忠衡は、郎徒共に暫く防キ矢を射させて後は館に火をかけ、自害の体にもてなし裏道より遁れ出て終(ついに)蝦夷にこゝろざし、津軽ノ深浦へとぞ落行ける。頃は六月廿日余り、深浦の港は兼て秋田ノ次郎が謀ひにて、交易渡海船一艘此港に泊して松前蝦夷の安否を聞居たりしが、忠衡は姿をやつし、主従十人余り賈人(アキヒト)の体に見せ、羽州秋田の者なるが、平泉へ商売の為に久しく滞留し此度松前へ渡海せん為と偽り、此船にこそ來りつれ。

註*詮(せん)―せんと、最期 *漸として―かろうじて、やつこのこと

*無量光院の狩獵の図の意義・評価―①田沢金五(たざわ・きんご)『奥州藤原氏と蝦夷の文化』に「蝦夷民族の本質を最もよく表したもので、畢竟、これが蝦夷の熱衷である俘囚の文化の姿であった」とある(即ち、仏教への無理解)。②高橋崇(たかはし・たかし)の『藤原秀衡』に「秀衡が武人として自己の本質を見失つまいとする悲願の現れ」とする(即ち己の武人としての限界と仏教を深く理解している)。

*深浦―現青森県西津軽郡深浦町、良港

*秋田ノ次郎―現秋田市周辺の武士か、秋田三郎致文(むねぶみ)の一族か

又忠衡がはからひにて、義経の御台所、姫君のいまだ四歳になり給へるを抱き、思ひく姿をかへ深浦の辺に忍びおはせしが忠衡介抱し奉り、増尾十郎権頭兼房が一子、増尾三郎兼邑とて少年十六歳なりけるが、御台、姫君の御先途を見届け奉らむと高館の城を忍び出、泉三郎が方に隠れ住みしが、此度御供にぞまゐりける。其の外秋田が郎徒、並に船頭、水主、梶取合三十余人、六月廿九日の黎明に深浦の港を出帆せしが、折しも心に叶ふ追風なかりしかば、小泊といふ処に数日泊して順風を相待しに、松前船一艘此港に着岸しける。如何なる船やらむと思へば、秋田次郎尚勝が郎徒松前の者を従へ、蝦夷の白紙鼻より來りし船なり。忠衡主従、御台をはじめみなく大に悦び、急ぎ郎徒に遇ひて様子を聞クに、義経主従恙なく松前に着岸し、夫より今は端(クチ)蝦夷白紙鼻といふ処におはしける云々と見え、

註*増尾十郎権頭兼房―真澄はこのように記しているが、久我大臣(こがだいじん)の娘で義経の妻の守役(もりやく)である権頭兼房(ごんのかみかねぶさ)と、『義経記(ぎけいき)』のみ出て來る増尾十郎(ますお・じゅうろう)は別人とされる。

増尾十郎の子が兼邑(かねむら)の由

*水主(かこ)―船の漕ぎ手 *小泊―現青森県北津軽郡、津軽半島の先端部

*秋田次郎尚勝(あきたのじろう・なおかつ)、藤原氏の家臣

*白紙鼻(しらかみはな)―松前の白神岬か?

また「海存、尚勝歸于日本ニ」といふくだりに、「既に義経、上(カミ)の國に凱陣し給ひければ、亀井、鈴木を始めとし伊勢三郎も飯墨太(カメダ)(今云亀田)より來り、志夫舍理(シブシャリ)の勝軍を祝しける。常陸坊海存は義経に向て、某儀は是より御暇を給はるべし。いまだ学業熟し申さず候(サフラ)へば駒形嶺に販り、彼異人が教しごとく仙道に入て再び神通を得ば、いよく君を守り奉るべしと、諸大将にも懇にいとま乞をぞなしかる。義経も、此度汝が來る功にあらずんば志夫舍理(シブシャリ)の大敵

を討取ル事難からむと、いとゞ名残を惜み給へども、元より留る気色なれば御暇をたまはり、又々渡り来るべし、我も此嶋を従へなば巡り会うべき折こそあらめと、日本渡海の船など下知し給ひければ秋田ノ次郎尚勝進み出て、某も君に従ひ奉り、君の武徳を以て年来ノ仇敵丹呂印（タムロイム）を討し事、日來の本望何事か是に如（シカ）ん。然る上は一ト先本国に立販り妻子にも遇ひ、重て再び此地に渡り、尚も兵糧運漕は某沙汰し申べしと義経に懇に暇乞し、常陸坊海存、並に松前の安呂由（アムロエ）と共に同船し、上ノ国の海浜より本国へぞ出帆しける。係りし後は松前より上ノ国までの通路自由にして、蝦夷の人民太平をぞ謡ひける云々」と見えたり。（按ルに、上ノ国に太平山あり、また天河（アマノカハ）といふ港川あり、それを今マ浦人天河（テンガ）太平といふはいにしへの諺にや）

註*上ノ国―北海道渡島半島北隣りの日本海側の港、勝山城（かつやまじょう）などがある

*伊勢三郎（いせのさぶろう）―伊勢国出身の武士で義経の臣下

*飯墨太・亀田―渡島半島の噴火湾側の地

*志夫舎理―北海道日高地方のアイヌ民族の根拠地、1669年のシャクシャイン

の乱はここから始まった

*仙道（せんどう）―仙人の術 *丹呂印・安呂由―アイヌ民族か？

*兵糧運漕（ひょうろう・うんそう）―戦時の兵の食料を船で運ぶ

しかして上の国にて嶋磨君誕生あり。また秋田ノ次郎尚勝一とせまり本国に在りて、こたびは妻もろとも松前へ渡りぬ。其物語に云、「秋田次郎尚勝は、常陸坊海存と共に過にし六月の末に松前を出帆し、海上難なく日本の地に着ければ常陸坊と別々になり、商人の姿に身をやつし本国秋田に帰りしが、頃は日本建久二年鎌倉の武威盛にして、過にし文治五年八月には、奥州に頼朝自ラ軍兵をひいて御館（ミタチ）を攻め給ふ。厚加志山（アッカシヤマ）（真澄按、重櫛山にして、柏木などいづく茂きを厚しといふ。此地青葉山の近

きに在り）に合戦あり、終に御館（ミタチ）ノ泰衡は家人河田ノ次（郎）が為に討れ給ふ。奥州も鎌倉殿の有（ウ）となりし事を聞キ涙を流しける。

註*嶋磨君―義経の子？ *文治五年―1189年

*厚加志山―阿津賀志山、伊達郡（現福島県）と刈田郡（現宮城県）に跨って築かれた奥州藤原氏の防塞（防壁）、藤原国衡を総大将として奥羽の精銳二万騎余りを配置、文治五年八月八日から十日まで激戦が行なわれた

*河田ノ次郎―出羽国比内（ひない）郡贄（にえ）（現秋田県大館市）に拠った泰衡の家臣、泰衡を討つてその首を頼朝に差出したが、逆に咎められて斬首された

されど本国秋田は静にして渡海も自由なりければ、密に兵糧の為米穀を積りて蝦夷に送り、又蝦夷の産物云々など本国へ積のぼせ交易日頃に十倍云々など見え、また奥蝦夷未曾久（ミソク）は蒙古と合戦度々に及びしが、程（ホド）なく義経諸軍勢を催し、前後八年の間に未曾久の乱を静め蝦夷を一統し、太平の政行れける云々。秋田次郎尚勝も後は松前にいたり住み、義経も後に未曾久に住み給ひ末はもろこしに至り給ひし事とおもはれたり。さりけれ（ど）御家人身方、みな命をまたくし蝦夷国を治めたまひし。うべも、平家の入水せし人々の末今も処々に在るを見て、その世ぞしのべれたる」

註*奥蝦夷未曾久―さらに北方（奥）のサハリンなどに居たアイヌ民族か？ 元朝は

サハリンアイヌと数回戦っている。元側はサハリンアイヌを骨嵬（グウエイ）と呼んだ

*義経末はもろこし…―義経が蝦夷地へ渡ったという伝説は、室町時代の「御伽草紙」の『御曹司島渡（おんぞうし・しまわたり）』などに淵源をもつが、江戸時代になると蝦夷島へ渡り、そこを征服してオキクルミの神と仰がれた、と発展した。さらに大陸への渡海伝説は、天明・寛政の頃、満州に渡り清朝の始祖となつたという物語が作られ、幕末から明治になると、ジンギスカンは義経也という話を作られた。日本人の、その時々々の北方や大陸への興味関心の高まりがその背景にあるとされる。

此平泉の金堂、講堂、法華堂、南大門、大阿彌陀堂、小阿彌陀堂、慈覺大師堂、無量光院、白山社、日吉社、祇園ノ社、天神ノ社、熊野十二所ノ社、金峯山、鏡山、隆藏寺、伊豆権現ノ社、護摩堂などぞかぞふるいとまなき其葺々（ソノイラク）も、ただ礎を見るのみ、いとゞその世ぞしのばれたり。また金雞山（キムケイサム）といふ山あり、そは清衡の時世ならむか、黄金（コガネ）の鶏雄（ニハトリメフタツ）を鑄（イ）させて、埋みおかれしよしをもて金鶏山とはいへり。こゝにうたふ「旭さす夕日輝（カガヤ）く木の下（モト）に、漆干盃（ウルシセムバイ）こがね億置（オクオク）」といへるは、此金鶏山をさしていふといへれど、此歌はいにしへの童謡ならむか。出羽、陸奥に、いさゝかの違（タガ）ひはあれど処々に在り。かゝるふる所、かなたこなたと見ありき千葉氏の家（モト）にいたり、日のくらくになりて宿を出る。此あたりの事は『吾妻鏡』にみなしし給へど、つばらにはえしも聞えず。

註*祇園ノ社―現平泉町平泉字祇園の八坂神社

*熊野十二所ノ社

*鏡山―現平泉町平泉字毛越にある伊豆権現堂の立つ山

*隆藏寺―毛越寺を構成する一寺、毛越寺の学頭

*金雞（鶏）山―現平泉町平泉字花立、『平泉旧蹟志』に「金鶏山 円隆寺の鬼門（はくとつ）にあたり、高館の未申（ひつじさる、南西）にある山を台の形に築けり、

基衡黄金を以て鶏の雌雄を造り、此山の土中に築込（つきこ）めて、平泉を鎮護せしむると云ひ伝へり。又郷説に秀衡漆万盃の内に、黄金億金を交へ土中に埋み

隠し置く」

とある

しかして摩陀羅神ノ御堂（ミドウ）に入りぬ。宝冠ノ阿弥陀仏ませり、此みほとけの後裡（ウシロ）の方に此御神を秘斎奉（ヒメイツキマツレ）り。摩多羅神は比叡（ヒエ）ノ山にも座（マセ）り。まことは天台の金比羅権現（コムビラノカミ）の御事をまをし、また素戔嗚尊ともまをし奉る也。また太秦（ウ

ツマサ）の牛祭（ウシマツリ）とて王の鼻の仮面（オモテ）をかゝふり、たかうななどをいなだき牛に乗り、手火炬（タヒマツ）うちふりて摩陀羅神の御前をはしる。また弘法大師の祭文あり、此事『都名所図会』につばらかなり。

註*摩多羅神ノ御堂―毛越寺常行堂（じょうぎょうどう）、安永の『毛越寺書出』に「常

行堂 金堂東 七十四間 丑ノ七分 別当大乘柳下坊 本尊宝冠阿弥陀如来 脇侍四菩薩御座候処 摩多羅神正宮殿二鎮座仕当山ノ鎮守ニ而秘仏二御座候間委細之儀八御書上不仕候 往古慈覺大師入唐之時清涼山ニ登リテ文殊大士ニ奉調常行三昧ヲ伝授シ帰朝之後 於比叡山ニ修行在之 当山ニ秘法興起シ給ヒ 就中毎年正月修正（しゅじょう）同十四日自二十日迄一山会合古禮之祭式等在之 天下泰平 太守様御武運長久 五穀成就之御祈禱修正仕 毎年正月御守札惣代ヲ以献納仕來候事」とある

*摩多羅神・摩陀羅神・摩訶羅神―『平泉雜記』に「魔多羅神 或書八斑神ト書ル八誤ナルヘシ、或人間、摩多羅神ハ平泉ノ鎮守ナリ、是何レノ神ナルヤト、答曰、羅山（らざん）翁ノ『神社考（こんじゃこう）』ヲ読ミテ其由来ヲ知ル、『神社考』

に『山家要略（さんがようりやく）』ヲ援テ曰、伝教大師（最澄）仏法ヲ求ント思ノ願アリテ、葛城ノ神ニ詣テ祈リケルニ、神伝教大師ニ告ゲ玉ハク、是大願ニシテ我力ニ及ハサル処ナリ、天神地祇ヲ祈ルベシ、但シ三輪大神（みわのおおかみ）ハ我國の地主（じしゅ）ニテ、天竺・唐土モ亦此神ヲ崇ム、カシコニ詣テ祈ルヘシト告ゲ玉フ、其後、伝教大師叡山ニ歸リ、山ニ三光ノ光ヲ認ムル処アリ、行テ是ヲ見レバ杉ノ大樹アリ、其後入唐ノ志ヲ遂ケ唐土天台（てんだいざん）青龍寺（せいりゅうじ）ニ至ル、其鎮守ヲ摩多羅神ト云、又金毘羅神トモ云リ、大師此神ハ何レノ神ナルコトヲ尋ヌレハ、三輪金光（みわこんこう）ト申奉ル神也ト答フ、於是大師初メ日本ニ在シ日ノ叡山ノ三光ハ此ノ摩多羅神ナルコトヲサトリヌ、求法ノ願成就シ日本帰國ノ後叡山ノ三光ノ所ニ神社ヲ建ツ、是則日吉大宮（ひえのおおみや）也、昔靈鷲山（りょうじゆせん）ニ於イテ十二神ヲ祭玉フ、其中二金毘羅アリ、是乃チ我朝ノ三輪大明神ナリ、弘法大師上下ノ醍醐ニ建立ス

ル清瀧(きよたき) 明神、慈覚大師西坂(にしざか) 二立ル赤山(せきざん) 権現、智證大師(円珍) 三井寺(みいでら) 二建ル新羅(しらぎ) 明神、何レキ入唐ノ時祈ル処ノ天台山青龍寺ノ鎮守ニシテ乃チ素戔嗚尊ノ父子ノ御神ナリ、云々」とある。現在の各地にある摩多羅神を総合すると、この神は極楽往生を約束する除災神、五穀豊穡の神として祀られている例が多い。

* 羅山翁—林羅山、江戸初期の幕府の儒官(1583~1657)、『本朝神社考』ほか著作多数 * 『山家要略』—天台宗の僧侶義源(ぎげん)の書

* 太秦の牛祭—京都の太秦の広隆寺(こうりゅうじ)で十月十二日夜に行う摩多羅神の祭り。寺中の行者が仮面を被り、異様な服装をして牛に乗り、殿舎を廻り、上宮王院(じょうぐうおういん)の前で国家安穩、五穀豊穡、悪疫退散の祭文を讀み上げる * たかうな—たかむな、筥 * 祭文—祭祀の時に神前で奏する中国風の祝詞

やをら神祭(マツリ) はじまれり。まづ篠掛(ススカケ) 衣着(キ) たる優婆塞出(デ) て、「八雲たつ出雲八重垣つまごめにやへがきつくるその八重垣を」と太鼓(ツツミ) 百々(トウク) うち鳴(ナラ) して謡(ウタ) ひ、また「千代の神樂を奉る」とうたひ、宝螺吹たて神供くさぐそなへ奉りて、隆藏寺の法印紅色(クレナイ)の鬱多羅僧に、みなすいさう(水晶)の念珠(スズ)をつまぐり、浜床(ハマユカ)の上に座(ノボリ)あまたの衆徒(スト)居ならびて、優婆塞は入りぬ。御誦経(ミスキャウ)の声尊く常行三昧といふ事をおこなひ、梵唄(ボムバイ)などもうたひはつれば、阿彌陀経を誦(ヨミ)つゝ立て神の御前をおしめぐり、また柳の牛王といふものを長き竹のうれに夾(ハサミ)て、さゝげもてめぐれり。

註* 篠掛衣—修験者が衣の上に着る麻の衣

* 優婆塞(うばそく)—在俗の男子の仏教信者

* 八雲立つ—素戔嗚尊が作ったという歌

* 神供(ひもろぎ)—お供え * 法印—最高の僧位、或は僧侶

* 鬱多羅僧(うつたらそう)—三衣(さんえ)の一つで、七條(しちじょう)の袈裟

* 浜床—浜縁(はまえん)ともいふ、神社などの向背(こうはい)の階段の下の床、参拝者が礼拝する部分

* 梵唄—梵語・漢語の歌詞を有する声明(しょうみょう)の一種

* 柳の牛王(やなぎのこう)—牛王は八坂神社などで発行する厄除けの護符、その裏に起請文を記す

此事終(ハツ)れば、れいの優婆塞出(イデ)キて法螺を吹キ太鼓(ツツミ)うてば、もろくの神供(ヒモロギ)をおろし、円居(マドキ)しける衆徒(ホフシ)の前に居(スエ)るをいなだき、神酒(ミキ)たうばりなほど、やや此直会(チホライ)はてて、衆徒ひとりすゝみ立てこわづくりして、「上所(シヤウドコ)、下所(ゲドコロ)、一和尚(イチワジャウ)、二和尚(ニワジャウ)、三和尚(サンワジャウ)、其(ソノ)次々(ツギク)の下立新人(ゲリフシムニフ)まで穀部屋(コクベヤ)へ入給(イラヒタヘ)と申(マラセ)」と、いと長やかによばふ。是を喚立(ヨビタテ)と云ひて中老の役(ワザ)也。御仏(ミホトケ)の脇方(カタハラ)より、承仕とて衆徒一ト入り出て、「上所、下所、一和尚、二和尚、三和尚、そのつぎくのげりふ、しむにふまで、こくべやへいらひたへと申ス」と、いらふを聞(キイ)て、こゝら群(ム)れ集(アツマ)る祭見の中より、「瓠槍(フクベヤリ)で突(ツク)といふが痛(イタ)い痒(カユ)いと申スな」と小ごゑに真似すれば、大ごゑにて、どよめき笑ふ事久し。

註* 直会—神事が終わった後に神酒・神饌を下ろし頂く酒宴

* 上所、下所—これと同じ祭文が日光山常行堂修正会(にっこうざんじょうぎやうどう・しゅしょうえ)においても唱えられている

* 喚立—呼立、常行堂大法会が終了し、故実祭祀に移行する区切りに行われる

* 中老(ちゅうろう)—毛越寺僧侶の階層の一つ

やをら田樂はじまりぬ。高足(タカアシ)、腰鼓(クレツツミ)なんどせしと

は姿(サマ)かはりて、此処(ココ)に舞ふ田楽の小法師等(ラ)は、胡桃木(クルミノキ)の膜皮(シラカハ)もて編たる大笠の、軒に垂(シテ)とりかけたるをかゞふりて、山吹色の袖テ広口衣に袴着て、桶の蓋の如(ゴト)なるいとく薄き太鼓を胸にかゝへて、此三人が舞ふ。こは槁(サマ)に登(ノボ)り飛(ト)びく躍(ヲドリ)て、今見る、焼豆腐さませし曲(ワザ)はせざりけり。烏帽子にしてとり掛たるが出たり、是をしてでんといふ。物の上手をもはら仕手(シテ)といふは師手也、能(ノウ)なんに師手(シテ)、脇(ワキ)あり。『盛衰記』に、知康はくぎやう(屈強)のしてでいの上手にて、つゝみの判官と異名によびけりと見えたるも、師手弟(シテイ)の義なるにやといへり。

註*田楽―農耕儀礼に始まる芸能。後に笛吹きを伴い、腰鼓・銅拍子(どびょうし)・鼈(さざり)等を鳴らしながら踊る田楽踊と、高足に乗り品玉を使い刀剣投げなどの曲芸をするものに分れた。鎌倉時代から南北朝にかけて歌舞伎である能も演ずるようになった *高足―こうそく、竹馬

*腰鼓―呉鼓・ようこ、伎楽に用いた鼓、紐で腰に提げ両手で打ち鳴らした

*垂―四手・紙垂、注連縄などに垂れ下げるもの。始めは木綿、後には紙となった

*してでん―現在はスッテンデンという。手ピラ鉦を持つ、本来は鼓を持っていた

*知康(ともやす)―平知康(たいらのともやす)、言岐判官(いきほつがん)、鼓(つづみの)判官ともいう。木曾義仲を討したが、後に没落した

*仕手弟―鼓を打つこと

小鼓(コツツミ)、銅鉦子(ドビヤウシ)、笛、編竹(サ、ラ)に、はやしたて、めぐりくつ踊りはつれば、あまたの衆徒太鼓うちて、「そよや、みゆ、ぜんげれ、ぜんが、さんざら、くんずる、ろをや、しもぞろや、やらすは、そんぞろろに、とうりのみやこから、こゝろなんど、つゞくよな」とうたふ。是を唐拍子(カラホウシ)とて、えしもそれとは聞キわくまじかりき事ども也。此からほうし終(ヲヘス)れば、して掛ヶ烏帽子ひきれたる、わか

ほふし、ひとりく踊りぬ。里人は「兎飛(ウサギバネ)」といふ。此曲はつれば黒き仮面(オモテ)かけて、うらわかき衆徒出て、あらぬふりして、うち戯れて入ぬ。そのさま能(サルガウ)の狂言(ワザヤギマヒ)のごとく、間(アハヒク)にかゝる戯をのみなし、また三冬(サムトウ)の冠とて、笏のごときものを三ところに立(タチ)たるそのさま、熱田ノ社の正月(ムツキ)ノ十一日のべろく祭に、兆鼓(フリツ、ミ)ふる神人(カウニム)の冠のごときかうぶりをいたゞき、白衣清げに着なし、王(ワウ)ノ鼻(ハナ)の面(オモテ)をかゞふりて、左の袖(ツデ)に水精(スイサウ)の数珠(ズ)掛ヶ鳩(ハト)ノ杖(ツエ)衝(ツキ)て、右ぎに白幣(シラニギテ)を持(モチ)、桑の弓、蓬の箭をおひて祝詞(フリト)立ながらとなふ、ひめたる事とてつゆも聞えず。

註*銅鉦子―銅拍子、金属製の打楽器で、二個一対で指に挟んで打ち合わせる。手ひら鉦。平泉では、現在は鼓を持っている

*田楽は現在、太鼓三人、鼈二人、スッテンデン一人、銅鉦子一人、笛二人の合計十人で行う

*唐拍子―路舞(ろまい)とも。慈覚大師の入唐中の体験・故事を舞う

*兎飛 *三冬の冠―三本の笏を立てたような冠

*熱田ノ社のべろく祭―現名古屋市熱田区の熱田神宮の一月十一日の踏歌神事(とつかしんじ)、年始に当り、地面を踏みつけて(反問、へんはい、この言葉から「剣

舞(けんはい)という言葉が生じたという説がある)土地の精霊を鎮め、除災と招福を神に祈る。俗に「オベロベロ」という

*兆鼓―振鼓、雅楽の楽器の一つ、でんでん太鼓のようなもの

*祝詞(のつと)―古来、大乗院(だいじょういん)が勤めてきた。その台詞は口の中で吟くように唱えられるので、殆ど聞き取ることができない。摩多羅神の御本地を説き、その御利益を称える秘文を唱え、御願円満(ごがん・えんまん)・息災延命(そくさい・えんまい)を祈る

また、れいの小法師あまた出て鈴うちふりて、たはぶれ唄(ウタ)うたひ、ざわめかしてはせ入りぬ。老女の面(オモテ)をかけてきぬかづき、神の御前に蹲りてくしけずるまねをし、神を拜礼(ヲロガミ)、たちよろぼひたふ(倒)れ、ぼけくしきさましける、是を「老嫗舞(ウバマヒ)」といふ。うばまひ入ればまた若法師、産婦(コウメル)まねしてたはぶる。しかしして若女の温顔ノ仮面(オモテ)に、水干にみだれあし(カタ)ぬひたるに精好の袴着て、鈴と扇とをもて舞ふ、是を「坂東舞」といへり。また禰宜(ネギ)とて布衣、烏帽子にて二尺(ヲタサカ)まりの竹の尖(ウレ)にわらをわがねむすびつけて、是を持って此舞ふ前に躡(ウスクマ)る。坂東舞をへて法師の顔に附髪(ツケガミ)ゆひて、わがどちは、ものしらぬものなれど、あまたの人を笑(ワラ)はせて来(ク)べしと楽屋よりたのまれて出たり。人のわらへば我が役はすむ也、いざ笑ひてよといへば、人みな大ごゑをあげてわらひどよめけば、さらば、よしや世中とて入りぬ。

註*きぬかづききぬかずき(衣被き)、平安時代、身分ある女性が外出時顔を隠すために衣を被ったこと、その衣

*老嫗舞—現在は「老女」ともいう、老女が神前に蹲つて白髪を梳るなど奇異な所作をする、手に持った鈴以外の楽器は用いない

*水干(すいかん)—衣服の一種、もとは下級の役人が着たが、後には公家の私服となり、また、元服前の少年の晴れ着となった

*精好(せいこう)—美しく作られていること

*坂東舞(ばんどうまい)—「若女(じゃくじょ)」ともいう、昔、鎌倉より神子が平泉に下ったことから坂東舞という、後に禰宜がからむ

*禰宜—神主(かんぬし)の下、祝(ほふり)の上に位する神職

*布衣(ほうい)—麻布製の狩衣の総称

*わがねる—輪の形に束ねる

*附髪—年少者の髪を短いのを補うため付け添えた髪

小法師二人、児装束(チゴサウソク)に扇をさしかざしてこゑたかく、「王母がむかしの花の友、桃花の酒をや、すらむ、さうまん是を伝へて、今が我に至るまで、榮花の袖をひる返す」と、返しうたひて入ぬ。またたはぶれ事はじまり、出来(イデコ)く唄(ウタ)うたはんにといへど、とみにもいでこざりければ、やよくと呼べどさらに人ひとりもいでねば、おのれひとり唄(ウタ)うたひてはせ入ぬ。

註*児装束・…児舞(ちこまい)のこと、立会(たちあい)ともいう

*「王母(おぼ)がむかし」・「王母ケ昔」はエの年、即ち甲(きのえ)・丙(ひのえ)・戊(つちのえ)・庚(かのえ)・壬(みずのえ)に演じ、「花折(はなおり)」はトの年、即ち乙(きのと)・丁(ひのと)・己(つちのと)・辛(かのと)・癸(みずのと)に演じる。真澄が見た天明六年は丙午の年なので「王母ケ昔」を演じたもの

*王母ケ昔—兒子二人の舞、王母の酒の謂れを語り、千年の春を寿ぐ地謡(じうたい)に合せて舞う。能の一つで、西王母が桃の実を周(しゅう)の穆王(ぼくおう)に贈つたことを脚色したもの。西王母(せいおうぼ)は中国で古くから信仰された女性の仙人。

*花折—兒子二人の舞、桜の折り枝を肩にして出てきて、神前に花を手向け、当社周囲を褒め謡う

*桃花(とうか)の酒・…現在は「桃花の酒をや詠(えい)すらん・相満(そうまん)是を伝えて、昔が今に至るまで、榮花の袖を翻す」と謡っている

かくて京殿といふが出(イテ)ぬ。「吾(ワレ)は都堀川の辺りに住む左少弁富任とはわが事也、たいしやう(太上)きんしう(今上)二代(堀河院鳥羽院)の勅願でんかのめい、くいやうのしやう(青竜)白馬(青竜寺白馬寺)の旧法(キウハフ)をつたへて」と、いとながやかにとなへて、「いかに有吉(アリヨシ)やさふらふらむ、小人衆徒の前にて、らんぶの一トさしも、げざむ(見参)入よ、なうありよし」「有吉詞 ほふ、ひえのやまは三千坊、坂本は六ヶ

所、大津の浦は七浦八裡九浦十浦、粟(アハ)田口、かぢむろ、つちうてば、てへく(こはいかに)と、太鼓の小撥(ホソバチ)の如(ヤウ)なるものを左右の手に持て舞ふ。

註*京殿舞(きょうどまい)―勅使舞(ちよくしまい)・京殿有吉舞(きょうどの・

ありよしまい)ともいう一種の狂言。越天楽(えてんらく)を奏する中、勅使置任(とみとう)は神前で一山の由来を述べる。次いで有吉が奥州下向の道々の勝景(しょうけい)を称えると、勅使は有吉を呼び出して都の御物語をさせ、その後、乱舞を一差し舞わせるうちに勅使も浮かれて相舞(あいまい)に舞つ

*たいしやう・現在には、「太上今上(だいじょう・きんじょう)二代之勅願天下ノ名区良勝(めいく・りょうしょう)之地也。青龍白馬ノ旧法ヲ伝ヘ扶桑(ふそう)安全ノ鎮護ヲ祈ル」という

*青龍寺―せいりゅうじ・しゅうりょうじ、中国の西安(せいあん)にあった寺、空海もここで密教の法を受けた

*白馬寺(はくばじ)―中国洛陽(らくよう)の東にある寺、後漢の明帝(めいてい)が中国初の仏寺として建立した

*げざむ(見参)―見せること、会うこと
*ひえのやま―比叡山、現京都府・滋賀県の境にある寺、中腹に天台宗総本山延暦寺がある

*坂本―比叡山東麓(現大津市)にある延暦寺の門前町

*粟田口―現京都市東山区にある東海道の京都への入口

*かぢむろ―鍛冶室?

「みやこをいでて街道はるくと、日数経て、あづまの旅にも成(ナ)りぬれば、京をしのぶのすりごろも、松山越えて衣河、そのごむせむ(御前)こそ恋しけれ。いかに、あれに見ゆるはありよしか、はつと申たれば、口の小(チヒサ)き木銚子にて、清(スミキツ)たる濁酒(ニゴリザケ)を給(タマ)ふ、此(こ)んぜんこそ恋しけれ。十二一衣のきぬのつまをとり、立出させ給

ふ御すがた、げにもらうたげなる風情して、一首はかうぞあそばせける。「朗(サエ)る夜の月にあやめは見えにけるひく袖あらばともになびかむ」「この有吉は、つきほろけたる、うす檜皮(ヒハダ)のをのこにてはさふらへども、やがて歌の御返事を申す、これ咳病(ガイビヤウ)こゝちにて」とて、かの小撥(ホソバチ)の如(ゴトキ)ものもて己(オノ)が黒半仮面(クロキワレオモテ)の鼻うちおさへて、鼻声になりて、「わがとの、東くだりのよなくに御前(ゴムゼム)ありよし月をながめむ」「いざせん、あらおもしろや」有吉は富任の従者(スサ)なり。

註*すりごろも―摺り衣、山藍等の汁で文様を布に摺り付けて染めた衣、信夫摺(しのぶずり)など *十二一衣―十二単 *松山―松山道か?

*つま―褌、長着の裾の左右両端の部分 *らうたし―いらしい、いとあしい *つきほろける―透きくずれる

富任扇の本末(モトスエ)をとりて、「しら玉椿八千代経てん」とうたひ舞(マ)へば、有吉も舞ふ。又「心解(トケ)たる」と富任がうたへば有吉声おかしう、「氷とけたるウ」と、烏帽子をうちふり打ふりもて舞ひ、富任、有吉も入れば、また戯(タハフ)るゝわかほふし、ゑひごゑに歌うたふ。やをら、たばふれほうしの入れば、「延年」といふ謡曲(ウタヒモノ)あり、そは「をみなへし」「姨捨山」「とゞめ鳥」「そとわ小町」也。二年(フタトセ)に、この中の四曲(ヨサシ)を舞ふ式(タメシ)也。此度は女郎花、姨捨山を舞ふ也。

をみなへしを舞ふ。「是はもろこしのごかん(後漢)のめいてい(明帝)の御代に、かぶむと申す老人にてさふらふ也」と老翁(オヂ)、老嫗(ウバ)兩人出(フタリデ)て、己(オノ)がむすめの死(ミマカリ)し事をなげき、塚にをみなへし、おしこぐさの生たるを記念(カタミ)の色と見つ、涙に袖をぬらしたるさま也。

註*しら玉椿・・・現在には「白玉椿八千代経テ 幾度ビ御世ニ逢ヌラン 春秋トムル

長生殿 齡ヲノブル菊水殿寄合マセウ」という由

*心解たるウー現在は「心解ケタル今宵カナ 氷トケタル今宵カナ」などと掛け合
う

*延年—大法会後の余興として僧侶や稚児が演じた芸能。平安中期に興り鎌倉時代に盛行した。真澄はこの種の芸能に強い興味を示し、各地に見物に出かけている。

毛越寺のものは一種の能である。昔は数十番あったが、今は「女郎花（おみなえし）」「姨捨山（うばすてやま）・伯母捨山」「留鳥（とどめどり）」「卒塔婆小町（そばこまち）」の四番のみ行う。「女郎花」と「姨捨山」は工の年、即ち甲・丙・戊・庚・壬に、「留鳥」と「卒塔婆小町」はトの年、即ち乙・丁・己・癸・辛に演じる。

真澄が見たのは天明六年丙午なので、「女郎花」「姨捨山」であった。

*「女郎花」—唐土の後漢の明帝の治世に「加ぶむ」という老夫婦が居たが、美しい二人の娘に先立たれ、その廟に詣でて、暫し微睡む夢に、娘らは女郎花・紫苑（しおん）の鼻の姿になって見えた。夢から醒めて悲しみ、なおも反魂香（はんこんこう）をたいて逢おうとすると、娘らは父母の嘆きを痛み、姿を現して末世を説いた。父母生道（ふぼ・じょうどう）のため、文殊・普賢菩薩が暫し娘となつて現じたもの、という筋である。

*「姨捨山」—八十歳に余り姨を腹部山（はらべやま）に捨てた男が後に狂乱となり、夫婦共に狂い渡って行くほどに、とある御社で柴燈（さいとう）をたき、七つの釜をあげ、湯立神楽（ゆたて・かぐら）を奏して、その功德により正気にかえる、という筋である

*「留鳥」—鶯宿梅（おうしゅくばい）に題材をとり、難波の里に住む老夫婦が梅を秘蔵していたとし、シテが尉（じょう）、ワキが姨で、他に間狂言（あいだきょうげん）風な宮人と内裏の役がある。この尉は実は菅丞相（かんしょうじょう）であったとする

*「卒塔婆小町」—シテが深草の少将の霊、ワキが姫の小町で、少将の霊が小町の老いの姿を見て歎き、百夜通（ひゃくやがよ）いの昔を偲び、うち連れて高野山

へ登り、ここで小町が卒塔婆に腰を下ろして大師に咎められる云々の話

また「姨捨山」を舞ふ。いとく恐（オソ）ろしく、むくつけき男（ヲノコ）の仮面（オモチ）かけ、髪ひげわ、けたるが出（イデ）ぬ。またおなじさまに女の仮面オモチに、髪は、おどろと乱したる狂女の姿して出たり。その女の詞に、「旅の人に、ものとひまゐらせたくさふらふ」男いらへて「いかにさふらふぞ」女「原部山（ハラベヤマ）にかゝりて善光寺へは、いづくをまゐりさふらふ」男「あら多（オホ）の人や、なにもの見か、さふらふぞ」女「あのわらはべなを申す。なに、あの男、ものぐるひの女こそ、幼少五ツのとし親におくれ、伯母（ヲバ）に養育（イヤウイク）せられて人と成（ナ）りさふらひしが、女がとかう憎（ニク）むよて、八旬（ハチジュン）に余る老母を腹部山（ハラベヤマ）へ捨置（ステオ）き、やかん（野干）の食（ジキ）となすよて、その怨霊（ヨリヤウ）にて、かやうにくるふなれ」こは、男も女ものにくるふさま也。男「姨捨山とはさふらふらむ、おもひもよらぬはらべやまかな」など、互（トモ）にもあらがひして、やがて諏訪のみやにいたりしとうたひて、「おもしろき社檀につきてさふらふ、宮人をもまたばやおもひさふらふ」

註*わわく—破れ乱れる *おどろ—髪などが乱れること

*八旬—八十歳 *やかん（野干）—狐の異称

*諏訪のみや—現長野県諏訪市鎮座の諏訪神社、祭神建御名方富命（たけみなかた

とみのみこと）

*社檀（しゃだん）—社殿 *宮人—宮に仕える人、神主

やおら宮奴（ミヤツコ）も出来てくさくもののがたりをして、宮奴、神をすゝしめ給ふければ、神鈴（ミスズ）の音のおもしろからぬよと、ものぐるひの女うたひて、またうたふ。「秋の野に、すだく鈴虫、業平の小鷹狩り、みよりのたかの鈴ならば、それは神にもいやまさん」と、うたひくはてぬ。さるがうななども、かゝる俳優（ワサヤキ）よりやはしまりけ

むかし。御燈(ミトモシ)などもなから消行キ鶏(トリ)もいくたびか鳴ぬ。戯れ小法師も衆徒も酔(エヒ)て謡曲(サルガウ)うたひ、また順礼唄を聞つ、こゝをたちづるとき、鈴木常雄。

見るになほしのばれず此寺のありしむかしのすがたばかりはとありしを聞て、

夜もすがら聞くも尊しこゑぐにうたふも舞ふものりのためしを

千葉氏の家に帰り来てしばしとてふしぬれば、ひましらみたり。(下略)

註*くさぐさいろいろいる様々な *すゞしむ清める、鎮める

*業平の小鷹狩―在原業平(ありわらのなりひら、825〜880)は鷹狩の名手であつた

*みより―鷹の右の方、鷹狩の際、鷹を左手に据えた場合、わが身が近くなる側だから *さるがう―ここでは能 *俳優―ここでは狂言

「やをら神祭はじまれる」以下の真澄の記述を整理すると、真澄が見た神事は次のような順序で行われたことになる。

千代の神楽―常行三昧供―直会―喚立―田楽―唐拍子―兔飛―戯れ―祝詞―戯れ―老嫗舞―戯れ―坂東舞―戯れ―児舞(王母がむかし)―戯れ―京殿(勅使舞)―延年の謡曲(女郎花)―嬉捨山)

二 摩多羅神事にかかる毛越寺の記録

◆まず、安永四年(1775)の『毛越寺書出』にある神事の内容を見ておく。真澄の仙台藩領入りの数年前に当る(『宮城県史27 史料編5』昭和34年(財)宮城県史刊行会より)。

一 書 出 岩井郡西岩井平泉村 天台宗 醫王山金剛王院毛越寺

一開山之事 當山八人皇五十四代 仁明天皇嘉祥三年慈覺大師開山ニ付當
安永四年迄九百二十六年ニ罷成申候事

一小名(こな)之事 毛越(ケコシ)

一故事來歴之事 當寺は前書之通人皇五十四代 仁明天皇嘉祥三年慈覺大師草創ニ而本朝ニ無隱靈場ニ御座候 其昔深山幽谷之地ニ而東に大河流れ衆病悉除之願海に入事を表し西ニハ高山連りて松風琴を調るが如し 頗昆明池の勢をなせり 四方登陰の奥四神感應の徴(シルシ) 誠に平泉の寶城他境之可類事に無之繁昌不朽之靈地ニ御座候 大師東遊之日ニ偶爾として此地に到り給へハ雲霧俄然として山に滿ち行路濛として難尋暫有て霽るるに及び前程を見るに白鹿の毛地に敷て綿々と連る事小径の如し 大師怪給ひ行事數歩にして其止る所を見給ふに陰森たる下に白鹿蹲踞して睡れり 大師進み行給ふに忽焉として見へす 又傍を見給ふに老翁出現して不測の吉瑞を告て去りぬ 大師歡喜涕泣して其地に金堂を建立し給ひ 年號を以嘉祥寺と號し又諸社諸坊舎を造立せり 然に藥師如來は東方淨瑠璃世界の教主にして國家安隱衆病悉除之願主なり 是故に藥師本願功德經に如來本願力故令其國界即得安隱と(談?) 給ひ誠に國家安隱を祈らんか為に大師手自醫王善逝を彫刻し金堂へ安置し給ひ 山を醫王と號し白鹿の毛を尋て山を越給ふか故に毛を越す寺と號す 胎金兩部界弘通繁榮守護の為に金剛王院と號せり 是一山の惣名なり 天竺の王舎城の丑寅に當て靈山(りょうぜん)と云へるあり 唐土の長安城の丑寅に當て天台山(てんだいざん)有 本朝平安城の丑寅に比叡山(ひえいざん)あり 三國共に王城の東北の間也 東北ハ鬼門の方成か故に是則鎮護國家の道場丑寅に立て天子本命安全を祈る所也 陸奥州は則東北ニ避けて帝都方鬼門に當れり 慈覺大師天子本命を擁衛し邦國の災禍を鎮護せんか為に 當州の中央に於て當寺を建立し鎮護國家の叡峯の道場に擬し給ひ往古繁昌せりといへ共 星霜漸移て諸社堂宇破壊に及べり 爰に長治(ちやうじ)年中 堀河院皇子 鳥羽帝御惱にましませし時 上皇是を悲しみ轉士を

召して鑑文を捧しむ 轉士詳に奏問し 即御祈願有て御惱平癒し後再興の勅語ありて、鳥羽院の御宇（ぎょう）左少辨富任朝臣 勅使として御下向あり 前の官領主に命して諸社堂宇悉再興有 富任奉行し給ひ官領主清衡基衡 勅命を蒙りて造立せり 結構美を盡し善を盡し多の力を勵し建立の功落成し遂に供養有て金堂圓隆寺といへる 勅額を賜ひ圓家の教法永く隆なるか為に號し給へり 爾来一山の號とす 仍而寺號毛越圓隆の兩名を呼來れり 此山は左青龍右白虎前朱雀後玄武四神相應の地を表示し建立し給ひし古今の靈場に御座候事

一恒例法會古實祭式左ニ御書上仕候事

正月古法の修正御祈禱所之事

一元 日 常行堂修正

(中略)

一二十日 一山僧中申ノ上刻方出仕仕酉ノ上刻修法相始畢而古實之

祭式并古傳共相努申候事

但十一日以來之式法ハ何も於常行堂ニ修行仕候事

一常行三昧供秘法御祈禱大法會修法の次第之事

一初夜三禮

一唱禮師 一梵唄師 一呪願師 一堂題師

一慶題師

一後夜導師三禮

一三十二相 一伽陀 一唄 一散花

一梵音 一錫杖 一廻向

一故実祭式之事

一笏拍子 一名呼立拍子

一田樂躍 一名場躍

一唐拍子 一名路舞 慈覺大師入唐之時於清涼山麓童子出現して舞

給ふといへり 大師當山草創之砌件之舞を傳來し給ふが故に唐拍

子とハ名付給ふ 又麓之道にて舞候故に路舞ともいへり 右之歌

舞に故事有

一祝詞 神秘あり

一老女舞 一名姥舞共いへり 神秘あり

一若女舞 一名坂東舞共いへり 神秘あり

一禰宜舞 一名職掌舞

一児舞 一名立会舞

一京殿舞 一名勅使舞共いへり 神秘あり

一有吉舞 一名物能舞

一延年式 一名延年舞

(下略)

◆次に『毛越寺延年の舞』昭和61年 毛越寺発行 の記述を見る(文章の執筆は本田安次氏である)。

〔上略〕 一、延年の舞について

延年の舞というのは、延年に舞われる舞ということ、延年とは、遐齡(カレイ)延年、齡(ヨワイ)とおく、命を延ぶる、即ち長命ということの普通名詞ですが、平安朝の半頃から、これが宴会に於ける管弦(カンゲン)の遊び、やがては芸能の催し、とくに寺々に於ける法会の後に催された法楽(ほうらく)に對して称せられるようになりました。

藤原定家（ふじわらのていか、さだいえ）の『名月記（めいげつき）』建仁（けんにん）三年（1203）十二月十四日の条（くだり）に、「乱遊（ランユウ）號延年」、同、寛喜（かんぎ）元年（1229）七月十七日の条には、「山門衆徒遊宴稱延年」、また『庭訓往来（テイキンオウライ）』には、「詩歌管弦者遐齡延年也」などとも見えています。当時の風として、法会に際しては、一山を讃め、寺の守護神をたたえ、天地長久、千秋万歳を祈り、法会に集まった人々の息災延命を願って、当時の種々の芸能の催しをしたのですが、神道に神楽があつたのと同様とも云えましょう。また賓客接待などにも行われました。

平安末から鎌倉、室町にかけて、これが一種の流行となり、奈良の東大寺、興福寺、多武峰（トウノミネ）、薬師寺、京都近辺の延暦寺（エンリヤクジ）、園城寺（オンジョウジ）、周防（スオウ）の仁平寺（にんぺいじ）などでも盛大に催されました。しかし最も盛大であつた多武峰のも天正（てんしょう）十三年（1585）を限りに絶え、興福寺のも元文（げんぶん）四年（1739）の維摩会（ユイマエ）の後の催しを限りに行われなくなり、つい近年まで伝えていた厳島（イツクシマ）、身延（ミノブ）のも今は廃れ、日光山（にっこうさん）また一曲を存するに過ぎず、最後に残つたものとしては、当毛越寺のを除くと、隣山中尊寺の白山宮祭、陸前小迫（オバサマ）の小迫祭、美濃長瀧（みのながたき）白山宮の六日祭、隠岐国分寺（おきこくぶんじ）の蓮華（レンゲ）祭、ほか延年とは呼ばれないが、延年風の催しをしている数カ所に過ぎません。中にもこの毛越寺のは、開山以来連綿（レンメン）と行われてきた常行三昧の修法（しゅほう）と、その後の延年も、明治維新の危機をのりこえ、今なお昔の倂をとどめて立派に催されています。

註*藤原定家―鎌倉前期の歌人、俊成の子、『新古今和歌集』他の撰者

*『名月記』11180〜1235年までの定家の日記

*『庭訓往来』―南北朝から室町初期に成立、初学者の書簡の文範例として、1年

の各月の消息文を集めた往来物

*東大寺―奈良にある華嚴宗総本山、四天王護国之寺とも

*興福寺―法相宗総本山、南都七大寺の一

*多武峰―奈良盆地南東端の山、倉橋山とも

*薬師寺―法相宗の大本山、南都七大寺の一

*延暦寺―比叡山にある天台宗山門派の総本山

*園城寺―大津市にある天台宗寺門派の総本山、三井寺とも

*維摩会―10月10日〜16日迄、維摩経を講ずる法会

*厳島の延年―旧暦7月14日、厳島神社で行う

*身延―山梨県身延町の日蓮宗身延山久遠寺

*日光山―日光市の天台宗輪王寺

*陸前小迫の小迫祭―現宮城県栗原市金成小迫の白山神社の祭礼

*美濃長瀧白山宮の六日祭―現岐阜県郡上市白鳥町長瀧の白山神社で1月6日に行

われる

*隠岐国分寺の蓮華祭―現島根県隠岐郡隠岐の島町の隠岐国分寺で4月21日に行

われる

常行堂別当大乘院に残つた『醫王山由緒相傳（いおうさん・ゆいしよ・そうでん）』は、常行堂回祿（カイロク）前百四十八年の文安（ぶんあん）六年（1449）に書かれたものようですが、それにはつぎのように見えています。

「常行堂大法会次第之事

修法一七箇日毎年從正月十四日到同二十日請僧十四人潔齋勤行

慈覚大師相承常行三昧供

奉供四十八色造華百味飲食

初夜作法

唱禮師 梵唄師 當題師 慶題師

後夜作法

後夜導師 唄 三十二相 伽陀 散華 盆音 錫杖

古實祭禮次第之事

古實祭禮二日毎歳正月十九日同二十日常行三昧供修法畢而一山大衆勤之

路舞 延年舞(特に能をさす) 田楽躍

呼立 祝詞 老女舞 若女舞 禰宜舞

児舞 勅使舞 音楽 舞楽一

その次第は、今日も殆ど同じです。

次に、祭礼に於ける常行堂の模様と、舞の様子について誌してみましよう。

三 常行堂内の飾付

慶長(けいちよう)焼失前の常行堂は、柱間がもう少し広がったようですが、今のは七尺七寸(約2・3^尺)間(マ)(但し中央は九尺六寸、約2・9^尺)の間四方、廊下の幅三尺四寸(約1^尺)、廊下までの高さ四尺六寸(約1・4^尺)に建てられています。奥殿には一山の総鎮守、摩多羅神(マタラジン)が祀られており、須弥壇(シュミタン)には、本尊宝冠(ホウカン)の阿弥陀(アマタ)仏並に宝依、功德、金剛鐘、金剛幢の四菩薩が安置されています。

註*比叡山常行三昧堂には阿弥陀如来、金剛法菩薩・金剛利菩薩・金剛因菩薩・金剛語菩薩の五尊像が安置されていた、日光山も同じ

祭礼当日には、堂内には飾付が施されます。即ち、奥殿摩多羅神の神祠(しんし)の前の密壇に五瓶(ごへい、御幣)が並べられ、白中央、青東北、赤東南、黄西南、黒西北の紙の紐が巻かれますが、これらに、松の梢の三指の枝が挿されます。これは中央大日並に四菩薩に供えられたものと云います。別に神祠の左右には、摩多羅神への供えものとして、忌竹(いみだけ)

が昔は五本、今は七本上げられます。

堂内には、須弥壇の後にかけて注連縄(シメナワ)がめぐらされ、これに雑華(ソウカ)とも飾花(カザリバナ)とも呼ばれる菊、桐、茗荷、大根、蕪菁(カブラ)、扇、鳥居などを半紙に切り抜いたものが下げられ、また、田楽用の花笠や烏帽子を、舞の始まるまで、四方の柱々に、高く竿の先につけて結びつけておきます。神祠並に仏前には、とくにととのえられた供饌(クセン)が上げられます。

昔は酉の刻(トリノコク、午後六時前後)結願と云われていましたが、明治十五年(1882)より民間で始められた蘇民祭(そみんさい)がこれに結びつき、午後正六時より勤行が始まり、間々に蘇民祭の神上り、別当上り、お護摩などが入り、舞が終わるのはほぼ明け方近くでしたが、戦後は、午後三時頃から献饌(けんせん)の樂の音がひびき、舞が終わるのは夜半に近い頃です。

註*忌竹―葬送用の幡・燈籠・天蓋の柄とする7本の竹

四 常行三昧供

須弥壇の前の経机を凹字形にならべ、正面六席、両側四席ずつ、都合十四人の僧が並んで努めるのが正式です。

常行三昧供は、開祖慈覚大師以来の秘法とされ、代々常行堂に於いて厳修されてきたものですが、これに初夜(ソヤ)の儀と後夜(ゴヤ)の儀とがあり、中に一寸休憩をおきます。その法衣も、初夜には鈍色衣(ドンシキエ)に七條(しちじょう)、もしくは素絹(ソケン)に七條、これに枝垂(シダラ)(玉禪、たまだすき)を左肩にかけ、後夜には素絹、五條に着換えます。その役割は、先の「大法会次第之事」で、「初夜作法」「後夜作法」として示されている通りです。

昔は修法中は他人が堂内に入ることを堅く禁じていましたが、今日では、お堂内側の永代献膳者席でとくに見学をすることができます。修法は、

惣禮（ソウライ）以下初夜（ソヤ）が正味二時間、後夜（ゴヤ）が約一時間を要します。

今は、修法も舞もすべて終了して後、供饌（ぐせん）を下げて神酒をいただきますが、昔は修法が済むとすぐ酒宴に移り、その後延年、法樂の舞が舞われたようです。

註*鈍色衣―法衣の一種、色と関係なく、無紋の絹で作ったもの

五 毛越寺の延年の舞

呼立ヨビタテ

田樂躍の始まる前にこの「呼立」があります。即ち二人の僧（五和尚、四和尚）が、田樂衆に囲まれ、向い合いに腰を下ろし、足声（ソクセイ）という秘事があり、後一人が本尊の方を向いて次のように呼びたてます。

承仕（シヨウジ） 承仕

一和尚（イチワシヨウ） 二和尚 三和尚

其次々 下流新入（ゲリュウシンニウウ）ニ至ル迄テ

コクヘヤヘイラヘタヘト申セクク

するともとは、鼻の高い面をつけた承仕が、須弥壇の側より「申ス〜〜」と答えながら出て、すぐ引込んだといいます。今は出ません。古記録によると、以前穀部屋というのがあり、呼立の後皆々ここに入って、法会の無事済んだことを祝って酒宴を催したといっています。

田樂躍

太鼓三人、編木（ササラ）三人、瑟丁傳（シツテイデン）・銅撥子（ドウバッシ）各一人、それに笛吹二人（今は一人）の、都合十人。昔は装束に善美を盡したといいますが、今は麻布の水干に裁著（タツツケ）、脚絆。太鼓方及び編木方は胡桃（クルミ）の木を網代（アジロ）に編んだ笠を冠り、その周囲に四垂（シデ）を垂れます。そして太鼓方には八重桜、編木方には白玉椿の造花を頂ぎに挿します。この花を田樂花とも笠花ともいいます。瑟丁傳に

銅撥子は童子で、四垂を垂れた日月の烏帽子を冠り、前者は鼓、後者が銅撥子を持ちます。但し「行道」になる前に、両童子はこれらの持物を置き、代りに中啓（ちゅうけい）を持ちます。笛吹には特別の支度はありません。昔、粧坂（ケワイザカ）に楽屋があり、田樂衆はこれより躍り出て大金堂円隆寺の前庭に至って奏したといっています。そこでこれを庭の舞とも場躍（ニワドリ）とも言いましました。踊り方には次の八通りがあり、色々に陣形を変えて踊ります。正式には四十分余を要します。

粧（ケワイ）、散（チラシ）、行道（キョウドウ）、立法（タチノリ）、

大水車 中八返 小水車 鳥鯨（トリバミ）

註*網木―簾、日本の民俗楽器、20号ほどの竹の先を細かく割って束ねたもの

*裁著―袴の一種 *脚絆―脛にまとう布

*四垂―垂、四手、玉串や注連縄などに垂れ下げるもの

路舞ロマイ

「唐拍子」ともいいます。慈覚大師入唐の折、清涼山の麓に両童子が出現して舞い、大師帰朝の後、当山創建して常行三昧供修法の折、再び忽然と先の童子たちが現れ、舞ったさまを伝えたといいますが、やはりもとは田樂躍についたものと思われまします。

田樂躍の太鼓を並べ、地方（チカタ）三人が笏（シヤク）を以てこれを打ちながら、古風な節まわしの歌をうたうと、瑟丁傳、銅撥子の二人の童子が、先のままの仕度で出てごみ、笏をとり、こもこも立って舞います。菅江真澄によりますと、里人はその舞姿が兔の跳ねるのに似ているというので兔跳（うさぎは）ねとも称しているといっています。

この歌は、わざと唐めかせて作られてはいますが、全くの唐歌ではなく、例えば「ゼンゼレゼイガ サンザラクンズルロヤ」は、「天台玄旨灌頂入壇私記（テンタイゲンシカンジョウニユウダンシキ）」に、「摩都羅神のハヤシの神語を示して云はく、シツシリシニ シツシリシ サラサニサララ

サニ」とあるといえますから、これに模して可笑しくつくったもののようにあり、「初利（タウリ）ノ都ニハ云々」は「梁塵秘抄（リョウジンヒシヨウ）」の法文歌（ほうもんのかうた）にも見えているもの。これらの上の句が歌われるときを一人が、下の句のときを他が舞います。

註*天台玄旨灌頂私記―

*初利―初利天（とうりてん）―六欲天の第二、須弥山の頂上にある。中央に帝釈天の止住する大城がある

*梁塵秘抄―後白河法皇編著の今様（いまよう）歌謡集

唐拍子歌

○ソヨヤミユク―ゼンゼレゼイガ サンザラクンズルロヤ

シモゾロヤ ヤラズハ ソンゾロロニ ソンゾロメニ

心ナン筑紫ニ ソヨヤミユ

○オ空ユク―雁ノ羽音ヤク

瑟丁傳（シツテイデン）ガ サイドノトノ サラサラメテ行クヨナ

ザレヲノ ウトノコゾノタマメハ 宮ノマヘ

○八十有餘のミヤツカイ―千代ノタマメハ ミヤノマヘ

ワラハラ―ニ 給ハロト 幸草（サユハヒグサ）ヲバ

アコノ千代ノ犬（イヌ）ニ授ケタマヘ

○初利（タウリ）ノ都ニハ―仏ノ御名（ミナ）ヲバ シラスナリ

リリヤ―リリ

五台山ニハ文殊コソ 六字ニ華ヲバ 散ラスナリ

リリヤ―リリ

祝詞

「祝詞」は、古来常行堂別当の大乗院（だいじょういん）、及びその分家に限って努めてきましたもので、最も重い式とされ、もし何れにも差支えがあれば、これを誦せず、一老（いちろう）が祝詞本を蔽封のまま仏前に供えるに

とどめました。その文も、口中につぶやくように唱えられるので、側からはほとんど聞きとれません。真澄の紀行にも「ひめたる事とてつゆも聞えず」とあります。

唱者の仕度は、三冬（サントウ）の冠と呼ばれる纓（エイ）の三本立った冠に鼻高、切顎（キリアゴ）の翁面、蜜柑色の袍（ホウ）に似て前を合せるように作った衣裳に浅葱（あさぎ）の切袴（きりばかま）、そして後に桑の弓に三節揃った蓬（ヨモギ）の矢二本をつけ、右手には宝冠の阿弥陀仏の前に供えておいた御幣をとり、左手に水晶の数珠（ジュズ）を懸け、鳩杖を持ちます。後見に導かれ、衣裳の裾（スソ）を童子にとられて出、正面で後見は、両手に大日印を結んで杖を支え、童子は裾をとり踞（ウスクマ）のまま。こうして秘文を唱え、祈祷の足拍子を踏み、幣をまろくまわします。

この秘文の内容は、摩多羅神の御本地（ごほんじ）を説き、その御利生（ごりしょう）を現わし申し、御願円満、息災延命、千秋万歳を祈りますもので、この文中に、「仏後ノ数曲ヲ調へ、今夜延年始メ置ク處也」とその次第をことわる一節があります。

註*常行堂別当大乗院 *三冬の冠

*纓―冠の付属品、冠の後方に垂れている細長い紐

*切顎―顎部が別作りになっているもの

*袍―束帯や衣冠などの時に着るまるえりの上衣 *浅葱―薄い藍色

*切袴―普通の丈の袴 *節―物の結合している部分

*鳩杖―はとのつえ、握りの部分に鳩の形を付けた老人用の杖 *大日印―

*御本地―仏・菩薩が衆生済度のために仮の姿をとって現れた垂迹に対して、その

本源たる仏・菩薩をいう *御利生―仏が衆生を利益（りやく）すること

老女

近年、型付と老僧の記憶により復活されました。白髪かつらに老女面、

水干に下袴をつけ、扇と鈴とを持ち、摩多羅神を三拝し、神前に蹲つて白髪を梳(クシケズ)る真似をし、なお、鈴をとつて舞います。百歳の老女の嬰鑠(カクシヤク)たるところを見せようとする、珍しい舞です。

若女

これは昔、鎌倉より神子が下つて舞つたさまをうつしたもので、「坂東(バンドウ)舞」とも云つたといひます。後から禰宜が出てからみます。若女は金の風折(かざおり)に水干、扇と鈴とを持ちます。

禰宜は烏帽子に布衣(ホイ)、下袴の支度で、手に幣を持つ。この舞を一たび見た人は、夢のような若女の舞姿に古寂びてひびく鈴の音を永く忘れることができないでしょう。最後に左のような不可解な問答があります。

禰宜言

一クワイ イカナル宮社 ネキハツクリ イカナル堂寺ニ

承仕アリシヤナウ サイテセキシヤウマシマス

若女言

一バン東ヨリ罷下リ 摩多羅神ノ御前ニテ カイナゾロマウス

イカガクルシカラズソツ

一兩人同音口ノ内ニテ ナフモサ

児舞

立会(タチアイ)とも言ひます。「花折(はなおり)」と「王母ケ昔(おぼがむかし)」の二曲を伝え、一曲ずつ隔年に演ぜられます。天冠(てんかん)、かつら、狩衣(かりぎぬ)、下袴(したばかま)、中啓(ちゅうけい)の小法師二人の舞で、地謡(じうたい)が三人ないし五人出ます。

「花折」ははじめ二人の稚児が桜の折枝(おりえだ)を肩にして出、向い合ひ、「いざさら花を折り持ちて、當社に手向け申さん」と謡ひ、出て神前に花を捧げ、戻つて當社の周囲を讀め謡ひ、千秋万歳を寿ぎ、のち地謡に合せ、中啓を開いて舞います。極くゆるやかな、舞樂風の舞です。左に

詞章の全文を記しておきます。

註*天冠―舞樂等の時に用いる冠、金銅で山形に造り、左右に剣形ものを立てる

*狩衣―平安時代の公家の常用略服 *下袴―指貫(さしぬき)の下には袴

*中啓―親骨の上端を外へ反らし、畳んでも半ば開いているように造つた扇

*地謡―能または狂言で、舞台の一隅(地謡座)に列座する者がうたう謡

花折

○シテウキ いざさら花を折り持ちてく 當社に手向け申さん(地謡反覆、シテウキまた反覆)

○シテ 夫れ當山な、東に大河流れ、衆病悉除(シツジヨ)の願海に入る事を表(ヘウ)し、西には重山(チャウザン)連つて、松風(マツカゼ)琴(キン)

を調(シラ)む、昆明池(こんめいち)のいきほひをなす、凡そ四方登臨(と

うりん)の興、まことに當社繁昌の靈地を示し候

○ワキ 各々榊の枝を折つて、當社に手向け奉るべく候

○シテ 晋(シン)の箕穎(キエイ)、劉伯倫(リュウハクリン)がなすところ、

白樂天が酒功賛(シユコウザン)

○ワキ 栄期(エイキ)が好みし三樂の酒、下若村(かじゃくそん)が美酒の

宴

○シテ かれらの酒を集めつゝ、萬劫(ばんごう)の甕(カメ)に湛(タタ)ゑ、

千年の釣瓶をおろし

○ツク(地謡) 五韻(ごいん)の調(シラ)むる銚子に注ぎ、世代(ヨヨ)を

ふるなる呉竹の、竹葉の盃手に取り持ち、あをもはい(鸚鵡盃)にひか

へて、千秋萬歳の長保樂を舞ふとかや

と以下舞になる、これには、舞樂「長保樂」の舞姿が取入れられています。

○ツク 月の桂の御盃、思ひくに指す袖の、天も長く地もまた齡久敷く、

國土泰平に、神奉の酒をうかめつゝ、此の神垣の諸人を、南陽縣の菊水、

天には切(トウ)る天甘露、温和(オンクワ)の天におこつて、皆榮樂(エイラク)を謡ふべし、皆榮樂を舞ふとかや

「王母ケ昔」は、同じ支度の兩人が中啓をとつて出、桃花の酒の謂れを語り、やはり千年の春を寿ぎ、地謡に合せて舞います。

註*昆明池—漢の武帝が、水軍訓練のため、長安城の西に掘らせた池

*登臨—高所に登つて眺め見下ろすこと

*晋の箕穎。劉伯倫—劉伯倫は晋の武帝に仕え、酒をこよなく愛した

*白楽天—中唐の詩人、白居易、772〜846年

*宋期—宋啓期、酒を愛した

*下若村—唐に上若、中若、下若の三村があった、上若村の水は最上の酒。中若村

の水はまあまあの美酒、下若村はただの水云々

*萬劫—極めて長い年月 *五韻—五十音図の各行の音

*あをまはい—鸚鵡貝で造つた盃 *長保樂—雅樂の一

*南陽縣の菊水—中国河南省南陽縣の不老長寿の靈泉

王母ケ昔

○ワキ・シテ 王母ケ昔の花の友く、桃花の酒をや詠ずらん(反覆同前)

○シテ 夜の雨ひそかに、曾波(ソウハ)の眼を潤し、暁の風に不言(フ

ゲン)の口先づ笑(エミ)をなす、三樂の友に誘はれ、山は又山に日を

暮らし、今宵の旅宿を詩歌にして、大斗(だいと)に酒の色を添へ、ゑ

いしんな袖を翻へせば、周郎は姿をかいつくるひ、日月の花を翫ぶ。

如何に相満や渡られ候

○ワキ そも何事を仰せ候

○シテ 桃花の酒の謂れを御存じ候か

○ワキ いーやさも候はん

○シテ 御存じ候はずは、委しう語つて聞せ申さん

○ワキ かゝる目出度きことこそ候はね、但し御身は如何なる人にてましまし候

○シテ 吾は是天台山の傍に、年来住める仙人にて候

○ワキ 扱(き)て相満が家に湧出る酒の泉の源は、何処よりか湧きたり候

○シテ 汝あまりに慈悲深く、民を憐れむその故、補陀落山(フダラクセン)

がその主大慈大悲の智水を、相満が家の泉となし給ふ

○ワキ さて酒徳頌(シュトクショウ)と云ふも酒の名、晋の七賢竹林が好

みて造りしごとくの酒

○シテ さて桃花と云ふも酒の名

○ツク 陶淵明(トウエンメイ)が菊の酒、九千歳の例(タメシ)あり、面白

の酒の名や、あら面白の酒盛や、相満是を傳へて、昔が今に至る迄、

榮花の袖を翫へす

と、以下中啓を開いて舞う。

○ツク 神豊(シンポウ)の酒は色深く、有明(アリアケ)の心地こそすれ、

盃の光さしそう菊水の、流れに我等おもれ出、千年の栄へおはします。

千年の春を重ねん

註*曾波の眼—「和漢朗詠集」に見える表現

*大斗—柱のすぐ上にある大きなます *周郎—後漢の武将の周瑜? *相満—

*補陀落山—南海上にあるという觀世音菩薩の住む山、日本では和歌山県那智山な

どとする *智水—仏の智慧を清澄な水に譬えていう語

*陶淵明が菊の酒—陶淵明の「秋菊有佳色」で始まる詩 *神豊—

勅使舞

勅使舞

「京殿有吉(キョウドアリヨシ)舞」とも云います。この曲は一種の典雅な狂言です。シテが勅使京殿、左少辨富任、ワキが狂言の有吉。シテの仕度は立纏(リュウエイ)の冠に狩衣、指貫(さしぬぎ)、中啓、ワキは烏帽子に

直垂、裁著（たつつけ）、脚絆、両手に田楽太鼓の撥（バチ）を持ちます。左少辨富任は鳥羽天皇の勅使、円隆寺の宣下（せんげ）並に勅額や国家鎮護の勅願文を齎（モタラ）して下つたと云われています。

はじめ越天樂（エテンラク）の奏樂で、勅使富任が出、正面神前に向つて立ち、「太上今上二代之勅願天下之名区良勝之地也。青竜白馬ノ旧法ヲ傳ヘ扶桑安全ノ鎮護ヲ祈ル」

と、先ず当山の莊嚴無比なるを述べ、「常行三昧ノ折ヲ移ス響ニハ、生死ノ長夜（タイ）明ナントス、梵唄（ボンバイ）唱禮（ショウレイ）ノ雲ヲ穿ツ音ニハ、無明（ムミョウ）ノ長睡（チヨウスイ）覺（サメ）ヌベシ」

と、勤行の貴さを述べ、平泉東西の勝景を讃え、さて名乗をあげて、当州へ罷り下つてより早や三年、下向の供に乱舞狂言の少官（しょうかん）を一人連れてきたが、それを昨冬都へ上（ノボ）せ、近日下着（げちやく）した。

註*立纏—纏が上を向いて直立した冠

*指貫—直衣（のうし）・狩衣等の時に着用する袴

*直垂—武家の代表的衣服で、垂領（たたくび）式の上衣で、袴と合わせて用いた

*裁着—裁着袴（たつつけばかま）

*鳥羽天皇—在位1107〜23年

*宣下—宣旨を下すこと *乱舞—能の舞、仕舞

*少官—小官、身分の低い官吏

幸いこのものを呼び出し、少人衆徒の見参に入れようと、有吉を呼び出し、京のことも色々物語らせ、とど乱舞一さしを舞わせるという趣向ですが、最後に勅使も中啓をひろげて、有吉と相舞（あいまい）に舞います。

「白玉椿八千代経テ 幾度ビ御代ニ逢ヌラン

春秋トムル長生殿（ちようせいいでん） 齡（ヨワイ）ヲノブル菊水殿（きく

すいでん） 寄合マセウ」

とシテが歌えば、ワキの有吉も、

「舞ヒマセウ」

と進み出ます。

シテ 心解ケタル今宵カナ

と、兩人は向い合いになり、

ワキ 氷トケタル今宵カナ

と、入れ代り、又入れ代り合つてもとなり、シテが、

「紐（ヒモ）トイテアソバン」

と云えばワキは、

「明ナバ根芹（ネゼリ）ヲ摘（ツミ）ヌベシ」

と収め、中啓をさして再び入れ代り、五常樂（ごしょうらく）の奏樂裡に入ります。平安の夢今にまどかです。

註*とど—とどのつまり *相舞—能・狂言その他で、二人連れ立って舞うこと

*長生殿—唐代の宮殿の一 *菊水殿 *根芹—セリの異称

*五常樂—雅樂の唐樂

延年の能

「古實祭禮次第之事」に「延年舞」とあるのが、実は一種の能で、昔は数十番あつたと云われていますが、近年に残つたのは「留鳥（トドメドリ）」「卒都婆（ソトバ）小町」「女良花（オミナエシ）」「姨捨山（ウバステヤマ）」の四番（なお古くは「金力自在」「慈念居士（じねんこじ）」の二番もありました）で、これを年に二番づつ交互に演ずる習いでした。四番の謡は謡本によつて完全に残っていますが舞は維新後絶え、大正十四年、清衡八百年祭の折「留鳥」が辛うじて復活され、それが今日に伝承されています。

「留鳥」を除いた三番の曲名は、今の能の現行曲とも同じですが、その詞章は全く異なっています。又、曲の組織も別です。その最も顕著な点は、こちらには今の能でいうワキがないことで、ここにいうワキは実はツレなのです。

註*慈念居士―自然居士?観阿弥作の能?

*ワキ―能でシテ(能又は狂言の主役)の相手となる役

*ツレ―能における助演的な役。シテやワキに伴う役と、独立した役とがある

留 鳥

鶯宿梅(おうしゅくばい)に材をとり、難波の里に住む老人夫婦が梅を秘蔵していたことにつくり、シテが尉(じょう)、ワキが姥で、他に間(あい)狂言風な官人と内裏の役とがあります。この尉は、実は菅丞相(カンショウジョウ)であったとされています。左にその一節を誌しておきます。

シテ いかにも官人申候

官人 そもそも何事を仰せ候

シテ 花の主難波の尉が三十一字(みそひともじ)を連ね候を、君の御目にかけてたび候へ

官人 何、花の主難波の尉が三十一字を連ね候を、君の御目にかけてたび候へと申され候か

三和尚(内裏の言) あんな婀娜(ヤサシ)や、か程賤しき賤のをだにも、三十
一字を連ね候ことのやさしさよ

ツク(地謡)「召しあれば梅は惜まず、鶯の宿はと問はゞ如何答へんく」
シテ 「実にことわりや哥によみ」

ツク 「詩にもあらはず言の葉を、我こそなさけあらざらめ、賤しき老
の身、いやしき賤の小田巻のくりかへしく、かほどになげく花

シテ の色、さのみになどかさそふべし、早々帰り詠むべしく」
シテ あんな嬉しや 梅を玉はりて候は如何に、急ぎ詠むべく候

ワキ うばも急ぎ詠むべく候
シテ 鶯故に留まる花なれば、今より後は此の鳥を留鳥と名付け、哥を
ば集の題に入れ、未代の物語たるべし。

註*鶯宿梅―村上天皇治世(在位946〜967)の故事。清涼殿(せいりょうでん)

の梅が枯れたので、紀貫之の娘紀内侍(きのないし)の庭の紅梅を移植させたところ、「勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はばいか答へむ」という歌が付
けてあったので、天皇は梅をかえしたという

*尉―能で老翁 *間狂言―能の曲中で、狂言方が登場して演ずる

*菅丞相―右大臣菅原道真(845〜903)

*賤(しず)のを―身分の賤しい男

*賤の小田巻(しずのおたまき)―倭文の芋環、「いやし」「繰り」の序詞

卒都婆小町

シテ深草の少将の霊、ワキが姥の小町で、少将の霊が小町の老の姿を見て
歎き、百夜通(ひやくやかよ)いの昔を偲び、打連れて高野の山に上り、こ
こに小町が卒都婆に腰を下して大師にとがめられる件りがあり、とどシテ
がこのお山禮讃の謡をうたいます。その最後の謡が居グセ(いぐせ)風に
節付けられているのは面白く、その節まわしも特殊です。ほかに間狂言(あ
いきょうげん) 風な新発意(シンボチ)と大師とワカ(周囲に居て言葉を挟む役)
とが出ます。左は昔語りの件りです。

ワキ 「やあらあさましや、我(ワガ)定めたる宿もなし。いつくをさして、
行くべきぞや」

シテ それよりは連れて行け小町、むかし物語せん。百夜かよひくといつ
し、其みづくきにはがされて、雨も降り風も身に染む夜半なれど、浮

身の笠を打ちかむり、
ツク 「あら闇の御夜や」

註*深草の少将―小野小町の許に九十九夜通ったという伝説上の悲恋の人物、僧正遍
照(そうじょう・へんじょう)或は大納言義平(よしひら)の子の義宣(よしのぶ)

かといわれるが不詳

*居グセ―居曲(いぐせ)、能の曲で、座ったまま舞わないもの

* 間狂言―能の曲中で、狂言方が登場して演ずるもの

* 新発意―しんぼつち、出家して間もない者、発心して新たに仏門に入った者

* あさましい―興ざめである、なさない * みづつき (水莖) ―筆、筆跡、手紙

* はがす―はかす、人の心を迷わせる

シテ 雲間を見れば我かよう、そことばかりをしるべにして、足に任せて
たどり行く、車の榻 (シヂ) に立寄りて、一夜、二夜、三夜、四夜、
五つ六つ七つ八重立つ雲のあなたなる、山鳥の尾を隔てたる心地し
て、何をかさのみ錦木の、数は積れど逢はぬ故、通はじばよと思へど
も、賤の女が、寒き砧 (キヌタ) のさり辻は、打捨て難き道なれば

ツク 「もしや遇 (アヒ) せぬ居待月、陸奥の阿古屋の松に木隠れて、いで
もやられん暗き夜に」

シテ 「猶我方を立出て」

ツク 「九十九夜迄歌ひしが、一夜となりて呉竹の、葉に置く露と消はつる」

シテ 「老歩にまかせ行きしかば」

ツク 「世間無常の理を、誰かは嘆かざるべきに、恨めしの小町や、いつ

の世にかは遇う (アフ) べし」

シテ やあら無念や、今の如くに思へばねったきものかな。

註 * 榻―牛車の牛を外した時、轆 (ながえ) の軛 (くびき) を支え、また降り降りの
踏み台として用いる具、腰掛け状

* 山鳥の尾―「長し」「尾」などの引き起こす序の詞

* あのみ―そつばかり、さほど * 賤の女 (しずのめ) ―身分の賤しい女

* 居待月―陰曆 18 日の月

* 陸奥の阿古屋の松―現山形市の東部の千歳山は阿古耶の松と阿古耶姫の伝説で有

名

女オミ良ナシ花シ

唐土 (モロコシ) 漢の明帝の御宇に、加ぶんという老人夫婦が居ましたが、
美しい二人の娘に先立たれ、その廟 (ビョウ) に詣でて暫しまどろむ夢に、
娘らが女郎花 (オミナエシ)、紫苑 (シオン) の花の姿になって見えます。夢
醒めて悲しみ、なおも反魂香 (ハンゴンヨウ) を焚いて逢おうとすれば、娘
らは父母の慨 (なげき) を痛み、姿を現して末世を説きます。父母成道 (じょ
うどう) のため、文殊、普賢がしばし娘と現じたということをつくつたも
ので、最後の冥土の有様を語り、末世を説く件りがやはり居ケセ風になっ
ています。シテが老人、ワキが姥、それにワカが出ます。左は最初の件り
です。

シテ 「是は唐、漢の明帝の御宇に、加ぶんと申老人にて候なり。我らが
中に二人の娘をもつ。かれらをこうじよゆうくわと名づけ、容顔美麗
にして漢朝に双 (ナラビ) なく、天下に響ありしかば、忝くも御后にな
るべき宣旨なり、嬉しくも国母 (こくも) の位に立たん事、是は如何に
とよるこびしに、浅ましや無常の暴風頻りに吹いて、閻浮 (エンフ) 如
限 (ニヨゲン) の里を出て、黄泉の旅に赴く悲しさよ」

シテ 「浪に宿かる月影のく、夜半の契はあるものを、是は石火 (せつか)
のその光、蜉蝣 (フユウ) 蜻蛉 (カゲロウ) の時の間も莊周 (ソウシュ) が夢
に異らず、夫は責 (セメ) ても年を経て、花に戯れ榮をなす、我が子の命
は夏の夜の、明るを知らぬ契かや、迎も別れには、老の我らに限らねど、
夫婦嘆きの袖ながら彼の冥廟 (マイビョウ) に詣でつゝ、急ぎ霊の手向せん
く」

註 * 漢の明帝―後漢第二代の肯定、在位 57〜75 年

* 女郎花―オミナエシ科多年草、秋の七草の一 * 紫苑―キク科の多年草

* 閻浮―人間のすむ世界

* 莊周が夢―そうしゅうのゆめ、夢と現実の境がはっきり区別できなくなるこゝ、
人生な果敢無いことのたとえ。莊周は道教の開祖の莊子

シテ 漸々来り候へば、是ぞ早我子の廟所にも着きたると覚候。是にて暫く休み、聖經をも読み、念仏とも弔ふべく候

シテ 「是はかうじよゆうくわの聖霊に手向くるぞゑ、出る日陪蕾(ツボメル)花の如くなる我子を先立て、六十(ムソジ)に餘る父母の、なきあとを問ふことの悲しさよ、老少不定前後相違の理(コトワリ)も、今こそ思ひ知られたりく」

シテ 「かほどあだなる世の中にく、ともに露とも消えもせで、何と浮世にながらへて、孝行末の物思ひ、難面(ツレナ)や命いかなれば、惜まざる身の残るらんく」

シテ 「あんな不思議や、少しまどろみて候へば、姉妹(キヤウダイ)二人のものが花の姿となり夢に見えて候は如何に

ワキ うばも少しも違はず左様に見えて候

シテ 「通夜(ヨモスガラ)、誠を至(イタ)す念仏のく其功力かや、こうじよが夢に見えつるは、うばもかつはと打驚き、ゆうくわもともに来て、我が手枕に立寄り、三界の独尊も、時月(シゲツ)の風に散玉ふ。生を五濁に受けながら、争(イカデ)か死をばのがるべし、我もはかなき夢のうち、父母や愚かや、まことかと袂に把(スガ)り取付かんと立寄れば夢にてさもあらず、いざ猶元の草枕、浮根の床に宿かりて、娘が姿を夢に見んく。」

註*老少不定(ろうじょう・ふじょう) —人間の死期は定まりのないもので、老少とは無関係であること *前後相違 —ものの順序は違っていること

*三界(さんがい) —衆生が活動する全世界

*独尊 —自分だけが他の誰よりも尊いとすること

*五濁(ごじよく) —五つの悪い現象

姨捨山

八十に余る姨を腹部山に捨てた男が、のち狂乱となり、夫婦ともに狂いわたつて行く程に、と或る御社で柴燈(サイトウ)を焚き、七つの釜をあげ、湯立神楽を奏してその功德により正気にかえるという妙な筋で、この狂乱の男女のほかに、巫(ミコ)とワカとが出来ます。

シテ やあら多(オホ)の釜や、一つ二つ三つ七つ迄立ち候は如何に

ワキ 色美敷(イツクシキ)花の色かな

シテ いづれにて花の咲て候はいかに

ワキ 湯に咲く花は花にて候はんか

シテ 如何なれば秋の花とは何とて候ぞ

ワキ おふそうきやうをたづぬるに、水漾(ミナギツ)て秋東(ヒンガシ)に流るゝといふたとへあれば、水に咲く花なれば、扱こそ秋の花とは候ぞ、色いつくしき花の色かな

シテ 何れの花の咲いて候はいかに

ワキ さいとふに咲く花は花にては候はんか

シテ それ五行をいはゞ木火土金水の第一、春は木を司るならへなれば、

さいとふに咲く花なれば扱こそ春の花ぞかし

ワキ 色いつくしき草の花かな

巫 狂乱なれど面白き問答にてあり、いざ神をおろし奉り、御湯の花を

もつて彼らが狂乱を祈り見べく候

註*柴燈 —神仏の燈明として焚く柴火(しばび)

*湯立神楽(ゆだてかぐら) —湯立の神事に伴う神楽、湯立は神前で湯を沸かし、

巫女・神職などがその熱湯に笹の葉を浸して、自分の身や参詣人にふるかける神

事。禊の一種であるが、占いの意味もある

舞 楽

昔は盛大に、寺の何かの際に行われたといひます。『吾妻鏡』には舞人(まいびと)三十六人、楽人(がくじん)三十六人と見えています。楽人は三

管三鼓（さんげん・さんこ）ともそれぞれ世襲でつとめてきました。今に、怡志（イシ）と呼ばれる名笛（めいてき）（龍笛、りゅうてき）を伝えています。

楽は古譜が残っていて、十数曲は今も奏し得ますが、舞はしばらく機会を失ってほとんど絶え、それでもつい最近まで「桃李花（トウリクワ）」や「還城楽（ゲンジョウラク）」も伝えていましたが、今は「迦陵頻（カリョウビン）」だけになっています。装束等も破損して、この「迦陵頻」も鳥兜、狩衣、袴で演じていましたが、このほど新調し、天冠、袍、羽衣（ウイ）の装束で、両手に銅鉞子（ドビョウシ）を持って舞います。

これらの多くの古風な、美しい舞が残ったことは寺の誇りであります。日本の立派な文化財であり、生きた歴史でもあります。ぜひ伝承がつけられて行きますようにと冀（ねが）わずには居られません。」

註* 舞人—まいにんとも、雅楽でいう舞を舞う人

* 楽人—雅楽を奏する人 * 三管—雅楽の笙（しょう）・篳篥（ひちりき）・笛

* 三鼓—雅楽の太鼓・羯鼓（かっこ）・鉦鼓（しょうこ）

* 怡志—笛 * 桃李花・還城楽

* 迦陵頻—雅楽の一、天冠をつけ、鳥の翼を負い、銅拍子を持った4人の童子が舞う

* 鳥兜—錦・金襴などで鳳凰の頭に象った冠

* 天冠—金色で透かしのある冠 * 羽衣—はころも

* 銅鉞子—銅拍子、金属製の打楽器、二個一対で、外側中央に紐を通し、指に挟んで打ち合わせる

◆まとめ

毛越寺で現在行われている祭礼の内容を整理すると、大略以下のようになる。

* 常行三昧供

初夜の儀

後夜の儀

* 延年の舞

呼立

田楽躍（庭の舞・場躍）

路舞（唐拍子・鬼跳）

祝詞

老女

若女（坂東舞）

児舞—「花折」 「王母ヶ昔」

勅使舞（京殿有吉舞）

* 延年の能（古實祭禮次第之事）の延年舞

「留鳥」 「卒都婆小町」 「女良花」 「姨捨山」

* 舞楽

「迦陵頻」

この内容・進行順は真澄が『かすむこまがた』に詳述したものとほぼ同一であり、真澄の正確な記述に脱帽させられる。加えて、真澄の記述には、各演目の間に行われた間狂言ともいふべき「戯れ事」が行なわれたことも記されており、まさに臨場感に溢れており、その点からも貴重な記録となる。ちなみに、真澄は路舞他の耳だけでは聞き取りにくい歌詞を詳細に記しており、各村の肝入より地誌関係資料の提供を受けていたのと同様に、毛越関係者から祭礼の資料提供を受けていたのであろう。

前記の本田氏は、現在、日本各地で行われている「延年の舞」の例を挙

げているが、参考までに、その一部を見ておこう。

まず、**日光山輪王寺**（にっこうざん・りんのうじ、栃木県日光市内）の資料によると、「延年の舞は慈覚大師が唐から将来した秘舞曲で、嘉祥元年（848）大師が日光山へ来山した時伝えられたという。天下泰平・国土安穩・延年長寿を願って日光山の諸仏諸神に奉納される舞である。

堂の中央に檜製の敷舞台が設けられ、二人の舞衆が舞台上に上り、『延年頌（えんねんしょう）』と呼ばれる声明（しょうみょう）を唱える僧侶たち（舞衆、しょうしゅう）は舞台の後方に並ぶ。舞衆は緋色の直垂に白の大口袴（おおくち・ばかま）・短刀を背に付け、白袈裟で頭を兜形に包む。入堂が終わると上座の舞衆は舞台正面に進み、『延年頌』の歌唱が始まり、舞が始まる。上座の次に下差が舞い、15分程で終了する」ここでは、この演目のみが伝えられている由である。

次に、文化庁資料によって「**隠岐国分寺蓮華会舞**（おきこくぶんじ・れんげえまい）」（島根県隠岐郡隠岐の島町）を見る。即ち、「国分寺の法会に当って四月二一日（本来は旧暦六月一五日、明治以降四月となった）に演じられる。舞はもと十数番あったらしいが、今は「麦焼（むぎやきの）舞」「眠りの仏」「獅子の舞」「山神貴徳（さんじんきとくの）舞」「竜王の舞」「太平楽の舞」「仏舞（ほとけのまい）」の7番のみを伝える。舞の出退場には、それぞれ出楽、入楽を奏し、各舞にはそれぞれの楽を奏する。楽器は蛸（とう）、笛、饒鉢（こはち、金属製の体鳴楽器）を用い、太平楽以外はそれぞれの仮面を使用する。本祭、裏祭を隔年に行い、本祭には舞の全曲、裏祭には「眠り仏」のみを舞う。」というものである。平泉と同様、「遠隔の地」隠岐の島に複数の演目が維持されていることに注目したい。

同様に文化庁資料によって「**長瀧（ながたき）の延年**」（岐阜県郡上市白滝町

長瀧の長瀧白山神社）を見る。即ち、「毎年、一月六日に長瀧白山神社の祭礼で奉納される神事芸能である。養蚕豊作を祈願するもので、修正（しゆしゅう）延年・六日祭・花奪い祭などとも呼ばれる。もと長瀧寺なる寺院で行われていたもの。正月六日は大晦日から7日目、即ち結願の日に当り、その結願の日の催しが修正会（しゆしゅうえ）の延年として残ったと思われる。

祭殿中央に菓子台を据え、神主、長老、学、中老、太鼓役、笛役などが左右に並び、まず長老の菓子の誉めの詞があり、承仕（しょうじ）が別座の者に菓子を配り、菓子台を群集に投げる。この後、延年の舞となる。若輩が笛、太鼓に合わせて田歌を歌い、「酌取（しゃくとり）」「露払い」「たうべん（当弁）」「乱拍子（らんびょうし）」「田楽」「しろすり」「はつきい（大衆舞）」の7種を舞う。

延年の途中から、拜殿の土間に吊るした桜、菊、牡丹、椿、芥子の5種の花笠を若者たちが人梯子を組んで、この花を挽ぎ取るうとする。この人梯子は3段でも届かない。挽ぎ取らないうちに人梯子が崩れる。花笠を挽ぎ取ることが出来ると、そのまま下に落ち、人々がその花を奪いあう。この花を持って帰ると、養蚕がよくできると、人々は大いに花を奪うことを怡（よろこ）ぶ。これが花奪いという。」というものである。郡上市白鳥町の石徹白（いとしろ）大師堂の金銅虚空藏坐像には秀衡寄進との伝承が伴っており、奥州藤原氏ゆかりの地である。また、この花奪いは奥州市水沢区黒石寺他の「蘇民祭」を連想させるものである。

最後に小迫（おばさま）の延年（宮城県栗原市金成）を、これも文化庁資料によって見る。もと勝大寺（しょうだいじ）を神宮寺としていた白山神社の豊作祈願の祭礼「小迫祭」の時（三月三日）に行われたもので、法会の後宴として行われる延年の芸態をよく残している。

この延年は、小迫にある勝大寺で法要を営み、白山神社に神輿渡御を行なった後、神社境内に設けられた土壇上で、様々の古風な芸能を演じる。「獅子舞（ちゃれこ舞）」「御山開（おやまびらき）（御法楽（こほうらく）・神明・老女・若女ともいう）」「入り振り舞（難刀舞）」「飛作（ひさ）舞（胡蝶舞・青陽舞）」「田楽舞」「馬乗渡し」などがある。「御山開」は、白山神社の神と二頭の竜女（白蛇、烏蛇）の伝説をパントマイムで表現する演劇的要素の濃いものであり、又、「馬乗渡し」には本物の甲冑、本物の馬を用いるなど、延年の古態を残しており、芸能史的にも貴重なものである。」というものである。

菅江真澄がこの祭礼を見物に行った際の日記が、天明六年三月の『(仮称)かすむこまがた 続』である。真澄はこの祭りを詳述しており、それを改めて検討したい。

毛越寺以外は祭礼の一部のみを伝える例であり、複雑多様な内容を保存・伝承してきた毛越寺の存在が際立っている。本田氏の記述の通りである。

毛越寺の延年の舞は、寺を構成する塔頭の嫡男子によって維持・保存されてきた由であり、それが12世紀から21世紀まで連綿と保存されてきたのである。その背景に存在したであろう様々な困難を乗り越えてきた寺関係者の御労苦を、改めて思わずにはいられない。

※ えさし郷土文化館・岩手大学平泉文化研究センター